
プロメテウスの呪い

神冥璽和魂

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

プロメテウスの呪い

【Nコード】

N9547H

【作者名】

神冥璽和魂

【あらすじ】

ある大学生に届けられた謎のオルゴール・・・・・・・・・・

明日の天気予報を見ようと思いテレビをつけたところ、突然火を噴いて黒焦げになってしまった。

ここ数年殆どニュース以外は見なくなったので買い替える気にもならない。

昔、一億総白痴化とかおっしゃった先生は先見の明のある偉大な方だったようだ。

こんな物がなかった江戸時代や原始時代の人間のほうが数段利口だったに違いない。

そういえばこの間からスピーカーの調子が悪いのを思い出した。

片方がガリガリ音を立てたり、全く鳴らなくなったりしている。

左右を繋ぎ変えてみると、やはり片方がおかしいらしい。

買い替えなければいけないみたいだけど、どこを探しても気に入るものが見つからない。

特にピアノの音が滑らかで繊細で、それでいて総奏の激情的な部分も再現出来るものでなければいけない。

自分が通っていた私立中学校の音楽教室に置いてあった、小振りでちよつと重そうなスピーカーのデザインが大好きだった。

それは艶々した綺麗な黒い箱に、金属のネットがスピーカーユニットの前面に被せてあり、大きなスピーカーユニットと緑色っぽい二つの小さなスピーカーユニットが縦に並んでいた。

音楽の先生はそのスピーカーに繋がっている、青いイルミネーションが鮮やかな、大きくて如何にも重そうな

アンプのボリウムを一杯上げて、マーラーのシンフォニーやワーグナーの楽劇を聴かせてくれた。

自分はブラームスやラフマニノフのピアノ・コンチェルトが好きだ

ったので、その頃それらを理解する事は全く出来なかった。
先生にわがまを言い、『パガニーニの主題による狂詩曲』を特別
に掛けてもらった事がある。

その中でも特に、ルービンシュタインの奏でる第18変奏の美しさと感動は、今でも忘れ難い思い出として残っている。

でも、あの綺麗なスピーカーは一体なんだったのだろう。

電気店で聞いても答えが出ないので、毎日懸命にインターネットを使って探し出して見た。

それはどうやら、NS-1000Mという型番のスピーカーである事が判った。

更に検索してみると、そのスピーカーは往年の銘機であり、マニア垂涎の的となっているプレミアム製品らしい。

そしてマグネットに錆が付き動かなくなり易いけど、専門のレストア店があるので余計な心配はしなくてもよさそうだ。

芸術品の様なスピーカー、どうしてもこれだけは手に入れなければならない。

着信音の『愛の夢』が鳴った。久し振りだが、どうせまたあの娘だろう。

「もしもし………」

「もしもし、駕籠君でしょ、最近授業………」

「死ねよ、馬鹿……じゃあな！」

クズ子………どうでもいい屑女の久美子からだ。

このクズ女に比べたら、NS-1000Mの典雅で魅惑的な佇まいは一体なんなのだろう。

どうしてもこれだけは手に入れなければならない。

中古品店は碌なところがない、守銭奴に等しい奴らが仕入れ値の3倍付け以上で運営しているらしい。

斯くなる上はネットオークションしかないのか。

しかしそれも、詐欺師が跳梁跋扈しているので油断ならない。それを覚悟の上で吟味するしかないさそうだ。

検索キーワードには、中古・往年の銘機・スピーカー・エンクロージャー・箱・美品とでも入れてみるとするか。

しかし何処も彼処も傷物とか、インチキ臭い物だらけで、選別は相当な時間が必要になりそうだ。

生涯の伴侶にする訳でもないこんな物……いい加減面倒くさくなって来るのだが。

往年の銘機といえば、JBL・アルテック・YLなんかも出てくるけど、こっちでも良さそうだ。

仕方ないから今回は見送ってのんびりと探すことにするか。

エンクロージャー・箱なんていうのも色々と出てくる。

パンドラの箱、パンドラの箱と……全くうそ臭い物だらけだ。

これは何だろう、オルゴールか。19世紀製造のスイス製オルゴール・パンドラの箱が、1000円スタートの2万円即落か。

但し書きには……19世紀に造られた希望を奏でるオルゴールです。聴く方の世界観によって、その旋律が及ぼす影響は様々な方向へと無限に広がります。

実はプロメーテウスと申す者は神々の陰謀に荷担し、実弟とパンドラを唆して人類に災厄を振り撒いた悪しき存在なのです。

パンドラの箱は現在に至るまで世界中で無数に創られ、神々による最終目的を成就せんが為、その研ぎ澄まされた鋭い牙を剥く機会を窺っているのです。充分にお気を付け下さい……か。

まったくインチキ臭いったらありやしねえ。

あつ、またリストか。クズ子に違いない。

「何だよ。」

「あのさ、何でいきなり切るわけ……………」

「邪魔なんだよ、邪魔。」

「本当に死んで欲しいんだ。」

「うん、但し他人様に迷惑の掛からない様にな。」

「そうなんだ……………駕龍君……………」

「じゃ、またあ、お前が生きてたら。」

「希望だけは捨てないから……………」

「ふーん、そうなんだ。」

「駕龍君は頭悪いから箱の中に何が残ったかし……………」

まったく鬱陶しい女だ。お前の養分は自分が吸い尽くしてるから、何処にも行くあてはないだろう。

クズ子はバンパイアに血を吸い取られた抜け殻だって事を自覚していない。

・ 今世紀最大の危機は希望が……………箱？箱が……………

「もしもしいい。」

「……………」

「おい……………」

「……………」

「クズ子、返事ぐらいしたらどうよ。」

「何ですか、先輩。」

「お前さ、さっき言ってた箱の中がどうたらこうたらな……………どういう意味なんだよ。」

「駕龍君には理解できないよ……………」

「だから何の箱だって聞いてんだよ、クズ。」

「パンドラじゃな・・・・・・・・・・」

パンドラの箱・・・・・・・・・・どうしてもこれだけは手に入れなければならぬ。

早速オークションに入札することにした。現在3500円だから5000円で入札して様子を見る事にしよう。

写真を見る限りでは傷もないし、そこそこの程度は良さそうだが、実物を手にしない限りはなんとも言えない。

落札価格はせいぜい10000円近辺だろうから、その辺りが勝負の分かれ目になりそうだ。

あつ、もう誰かが6000円をつけてる。残り時間は後14時間くらいか、急ぐ事もあるまい。

また電話だ・・・・・・・・・・やっぱりクズ子からか。

「あのなあ、俺のケータイはお前の専用回線じゃないんだぜ。」

「・・・・・・・・どうせ誰からも掛かって来ないじゃん。着信履歴見たことあるもん。」

「邪魔臭いから消してんだよ。お前は覗きの趣味でもあるんだろう、エロい女だな。」

「この間さ、真夜中に渋谷で何ウロウロしてたの。」

「そういうお前さんは何してたんだよ。」

「コンパに決まってんじゃない。他に・・・・・・・・」

「コンパの後、ホテル街に歩いていく途中に俺を見たってワケか。」

「駕籠君て嫉妬深い人だね。」

「お前から病気でも感染されたらかなわないからな。」

「それはあたしが言う言葉でしょ。」

「お前はな、俺が養分を吸い取った後の産廃だってこと忘れんなよな、クズ子。」

「バツカじゃないの、あなただって粗大ゴミと変わらないでしょ。」

「眠いからさ、お休みい。」

「だってまだ午前・・・・・・・・・・」

あいつは何が言いたかったんだろう。嫉妬深いのはクズ子の方なんだ。

果報は寝て待てとはよく言ったものだ。今日は朝っぱらから本当に疲れた。

どのくらいの時間が過ぎたのか。目を覚ますと部屋の中は真っ暗だった。

灯りを点け、時計に目を遣ると午後9時を回っていた。

オークションはもうなっているのか。ログオンしてみると予想に反し入札額は急騰していた。

現在17000円・・・・・・・・後2時間弱で終了だ。

元々興味のない物なので、即落価格2万円が高いのか安いのかは自分には判らない。

しかし出品者がその程度の値段でも良いと考えているからには、妥当な値段なのだろう。

謎の箱・・・・・・・・・・どうしてもこれだけは手に入れなければならない。

一週間後の朝、その箱が宅配便で送り届けられて来た。

新聞紙でぎゅうぎゅう詰めダンボールの中から、小さい木製のオルゴールを手にとった。

ゼンマイを巻かなければ音は出ないだろうけど、取り敢えず蓋を空けて中を見てみよう。

蓋を開くと『カルミナ・ブラーナ』のメロディーが流れ始めた。

やはり古く見せ掛けた模造品だった様だ。裏側に1812年と刻印

してあるのが尚更悪質だ。

更には底が浅過ぎて小物入れにもならない。一応鏡だけは付いているので、クズ子の誕生日にでもくれてやるか。

それから数ヶ月が過ぎた頃、駕龍が通う大学の近くのカフェに駕龍とその友人の姿があった。

駕龍のごく最近の日課は市立図書館に行く事で、大学の門をくぐるのは半年振りくらいだった。

そして数少ない有人である川上大輔を掴まえて、何やら議論を始めたのだが。

「駕龍はな、もっと違う時代に生まれてくるべきだったのかもしれないなあ。」

「そんなにお前は俺が、馬鹿で阿呆で時代遅れだと思ってるのか。」

「時代遅れって言うよりも、時代錯誤だよな。」

「それじゃあ、お前はこの世の中が一切矛盾のないユートピアだとも思っている訳なのかよ。」

「そう考えている奴は結構一杯いるみたいだぜ。俺は違うけどな。」

「美味いもの食って、そこそこの贅沢が出来れば文句を言わない奴が多いって事だ。食いっぱぐれる心配がなければそこが天国なんだ。俺は違うけどな。」

「いや、お前の意見はどうなのかと聞いてるんだぜ。」

「俺は特に主張しようとは思っていない。他人が何をどう考えようがそれは他人の勝手だがな。」

「お前は典型的なノン・ポリティカル志向なんだよ。流されるがま

まに生きて、濁流に呑み込まれ溺れた時になって初めて気が付くタ
イプだ。

そしてそれは社会が悪いからだとか、他人が悪いとかヒステリック
に喚き始める。表面上他人に対して無関心を装ってはいるが、
他人と違うのではなく同じ穴のムジナなのだと認めたくないだけな
んだ。」

「そうやって頭ごなしに他人を非難しようとする姿勢が時代錯誤だ
って言ってるんだぜ。」

「何もしようと思わないのも自分自身の勝手だろうけどな、そうい
う奴はそのまま墓穴目指してまっしぐらに進めばいいんだ。」

しかしお前みたいに何等の主張もないのに、俺は他人とは違うとか
平然と言い放つ神経がおかしいんだ。」

「お前は何かも口に出して言い表さないと理解できないんだろ、
子供みたいに。」

「卑劣漢と後ろ指差されるくらいなら、ガキだって言われた方がま
だまだぜ。」

「それじゃあまるで、自分が或る種の小児病だって認めてるような
もんだな。」

「お前には何を言っても無駄だと判ったよ。」

「そうやって拗ねるのが子供と同じなんだよ。」

「お前こそ世をすねて生きてる人間の代表じゃあないのか。少なく
とも俺の方がお前よりも前向きに生きてるつもりだけだな。」

「まあ、どうでもいいよ。特にお前の生き方なんかに興味はないか
らな。」

「お前はな、これからの俺の行動を羨ましそうに見つめてるだけで
いいんだよ。」

「ああ、そうするよ。しかし笑い者にだけはならないように注意し
た方がいいぜ。」

「友達として言ってるなら一応覚えとくわ。」

「うんうんうん、まあ、頑張れ。」

そこへ窓越しに偶然駕龍を見つけたクス子こと久美子が、息を切らしながら割り込んできた。

「こんにちは、川上さん……でしたよね……一緒にいいですか。」

「ああ、森下さんだっけ、ちょうど帰ろうと思ってたから。じゃあな駕龍、ごつつあん、じゃまた。」

「えっ、ランチ食ってピザ食ってケーキ食って……全部俺が持つのかよ……」

「駕龍君、随分だね。」

「何が随分。」

「ケータイの電源切って、何ヶ月シカトしてたと思ってるの。」

「あれはなお前と同じで浪費家だからな、バッテリー節約の為にさ。」

「変だよ、絶対に変だよ。」

「何が変。」

「駕龍君は欲望って起こらないんだ。」

「何の欲望。」

「本当は女子高生が好きなんじゃないの、女子中学生とか。」

「小便臭いのはあんまり趣味じゃねえな。」

「へー、じゃ丸の内のOLとか、どっかのキャバクラ嬢とか見つけたんだ。」

「これだから下々ってのはな、俺様とは永遠に相容れない関係なんだよ。」

「何言ってるの、馬鹿。」

「下賤の輩とまでは言わないけどな、お前は俗世間の女王みたいな

もんだな。」

「まさか変な宗教に引っ掛かったんじゃないよね。」

「お前とは生まれつきデキが違うんだ。」

「ふくん、出家でもして欲望がなくなったのかと思った。」

「欲望、欲望ってよう、お前の頭の中は煩惱しかないのかよ。」

「どうしてもお前だけは手に入れなければならぬ、とか何度も何度も言ってさ、あれって手籠めって言うんだよね。」

「馬鹿かよ。合意のものと和姦だろ。」

「どうせ養分を吸い尽くした女に用はないって言いたいんでしょ。」

「そんなこたあねえよ。まだ使えるかもしれないしな。」

「あのさ、今まで一度も駕籠君のお家に呼んでくれた事ないよね。どうしてなの。」

「お前の声がデカイからじゃね。」

「今日さ、行っているかな・・・・・・」

「いんや、駄目じゃ。」

「ご両親が・・・とかなの。」

「ほとんど顔合わすことないけどな。」

「じゃあ、どうして。」

「世界征服を目指す者にとって、女は足手纏いにしかないからだ。」

「駕籠君の馬鹿・・・・・・・・・・もういい・・・・・・・・・・」

「あつ、お茶代・・・・・・・・また俺が払うのかよ・・・・・・・・」

まったく何なんだあのアンポンタンは。自分の性格くらい充分に知っているだろうに。

恐らくあいつには相当なマゾの血が入っているのだと思う。自分が甘やかしたのも原因かも知れないが。

あつ、あの馬鹿、なんで戻ってくるのか・・・・・・・・・・

「出戻りみたいな真似はみつともないからやめろよ。」

「注文したスパゲッティとピザ食べてから帰るから心配しないでね。」

「スパとピザ両方食う下品な女つてのも珍しいんじゃない？」

「喫茶店でビール何本も飲んでる客も珍しいよね。それで何本目なの。」

「俺はな、豚みたいにガツガツ食わないからストイックなんだよ。」

「そうなんだ、お酒飲んでる人はみんな享樂的なかと思った。」

「二大本能しかないお前に理解するのは難しいけどな。」

「それって、すごいイヤミだね。」

「人間てのは本当の事をグサリと刺されて言われると頭に來るらしいぜ。」

「衣食足りて礼節を知る、でしょ。」

「人はパンのみにて生きるにあらず、だよな。」

「お食事してる間は黙って欲しいんだけど。」

「あつ、そうだ、今度なジャズクラブに連れてってやるわ。」

「え、クラシックの話しかしたことないじゃん、ジャズなんて解かるの。」

「俺は超ワイドレンジな人間なんだよ。」

「……あつ、すみませう……あと、コールスローサラダとレアチーズケーキとオレンジジュース下さい。」

「……まあ、お前には高尚な趣味は一切理解できないだろうけどな。」

「でもジャズって身近だよな、ケニー・Gのテナーが素敵……」

「この馬鹿、クズ、百姓女、ソプラノサックス奏者なんだよ、見りゃあ分かるだろ。ライブでテナーやアルトもたまにやるけどな。」

「楽器とかどうでもいいし……」

「明らかにジャズ・フュージョンの世界にはクラシック音楽が多くなる影響を及ぼしているんだけど、

俺の出発点はガーシュウインの『ラプソディー・イン・ブルー』だな。きっかけはデオダードだ。

楽器にしても旋律にしてもクラシックがなければジャズなんて存在出来なかったのは当たり前前の話だ。

いわば、俺様なくしてお前が存在できないのと同様だと考えれば分かりやすいよな。

ポップス系シンガーのジョニー・ソマーズとかコニー・フランシスが歌うスタンダード・ナンバーが泣かせるんだよなあ。

シビレまくるつつうたら、スタッフとかなパコ・デ・ルシアとか、でも一番のお気に入りにはリー・リトナーだわな。

後な、クラシック音楽を元にしたフュージョンの名曲つつうたら、フューズ・ワンがアレنجしたスメタナの『モルダウ』だな。

ジョン・マクラフリンのエレキがクワアアアアア、ラリー・コリエルのアコギがクワアアアアアアアア。

でも最後は結局マイルスやコルトレーンに行き着くちゅうか、舞い戻るちゅうかだ。

．．．．．おいっ、クズ子．．．．．いやに便所の長い女だな。」

オルゴールのネットオークションに懲りた駕籠は、すっかり惚れ込んでしまった憧れのNS-1000Mを探すべく、中古店の情報を丹念に調べていた。

そして大手の中古ショップに2セット在庫がある事を知り、おっと

り刀でその中古店へと足を運んだのであった。

見た目にはどちらも大きな傷はなく、視聴しても全く違いが出ない為、製造番号300000番台の比較的新しい方を購入し、二日後の配達を待つ事にした。

帰る途中ジャズの復刻名盤を見つけようと、CDショップに寄って買い漁っていたところ、急に後ろから肩を叩く者があった。

駕龍が通う大学の経済学部教授の日下部泰蔵だった。にこにこしながら近況を聞いたり、大学内での出来事などを早口で喋り始めたのだが、

買い物も終わったので店を出て、大通り沿いにあるベンチに腰掛け、話を続けることにした。

「そうですね、中退とかは全然考えていないんですけど。今いろいろとやりたい事もありますので。」

「うーん、君は優秀な学生なんだから是非ね、ちゃんと卒業して良い仕事に就いてもらいたいと思うんだけどね。」

「まあ、就職の事も全然頭にはないですし、学問の何たるかも疑問を抱き始めたんですよ。」

「ああ君ね、疑問というのは学問総てを修めた上での考えなら結構だけどね、中途半端なまま断片的知識で判断しても後々、後悔の念が残るものなんだよ。」

「しかしたとえ後悔するに至ったとしても、それは自分の責任に於いて行った行為ですし、人生を棒に振る結果に終わっても自身の無能に原因があるからなのです。」

「それじゃあまるで自暴自棄と同じじゃないか、自殺行為に等しいとは思わないのかね。」

「死ぬのを目的にして生きている人間はいないと思いますが。」

「そうではなくて、君は将来に対する計画性が皆無ではないのかと言っているんだが。」

「これから何をやるかは考えています。ただそのプランが煮詰まっ

た状態に達していないだけなんです。」

「それは恐らく具体性の欠如した抽象的観念に過ぎないから、理論化が不可能なんじゃないか。」

「完璧無比な論理などこの世には存在しません。論理的誤謬は行動する事によって自己正当化を可能にしてきたのです。」

「君は学生によく有りがちな抽象論の蟻地獄に嵌ってしまったみたいだな。」

「いえ、自分は決して空想を空想で終わらせるつもりはありません。」

「自身の大いなる夢を実現した人間など、世界中探しても数えるほどしかないんだがね。」

「自分はその数少ないひとりとして名を残すつもりでいるのです。」

「君は『夢見る人』になってしまったんだな。」

「フォスターの曲ですね。」

「そして『虹を掴む男』のまま生涯を終えようとしている。」

「何ですか、それ。」

「古く、ハリウッド映画。」

「はあ………」

「まあ、どうでもいいから、卒業だけはしなさい。分かったね。」

「はい、なんとか。」

自分はこの先生を嫌ってはいなかった。だから余計な事を喋り過ぎたかもしれないと、少しだけ思った。

それよりも購入したスピーカーの到着が待ち遠しい。今は、他にも頭の中にはなかった。

二日後、待ちに待ったNS-1000Mが届いた。店員に勧められて買った太いスピーカーケーブルに繋ぎ替え、いよいよワクワクの音出した。

アンプは父親のお古を貰った物だが、当時とても高価だったらしい

マークレビンソンJC-2Lプリアンプと、
クレルKSA-100パワーアンプでNS-1000Mをドライブ
だ。

まずはやはりピアノ曲を幾つかチェックしてみよう。

ピアノトリオのスタンダードナンバーと、最高のアナログ録音がな
されているオーディオ・ラボのSIDE by SIDEシリーズ、
そしてベートーベンのピアノコンチェルトを一番から『皇帝』まで
代わる代わる、取っ換え引っ換え掛けてみる。

10枚以上聴いてみたが、これは実物のピアノの音質をも上回るよ
うな、まさにピアノの音を再現する為に生まれて来たような本格的
なスピーカーシステムだ。

打楽器と管楽器が重なり合う所でも音が全く崩れないので、大規模
なオーケストラと大合唱も聴いてみたくなった。

一枚だけ選ぶとすれば、ラトル・ベルリン・フィルの『カルミナ・
ブラーナ』……か……オルゴールの……
しかしあのオルゴールは模造品とはいえ、どうしてこの曲を選んだ
のだろう。

背丈ほどもある大型のオルゴールでも再現など出来そうにない、フ
ルオーケストラと大規模な合唱団による曲。

そもそも形の大小には関係なく、オルゴールの単音には相応しくな
い曲を何故わざわざ……おかしい……

中学時代の初恋の人に回り逢ったような気分で、もう一週間以上ス
ピーカーのデザインにうっとりしながら、

朝から晩まで音楽鑑賞に耽っていたのだが、果たして自分はこんな
事をしていて良いのだろうか。

確かにこの恋人はクズ子みたいに生意気な口も利かず、自分の欲求を満たし、毎日せっせと家事をこなしてくれる貞淑な女性かもしれない。

これを購入した中古ショップの人の話によれば、新品の高性能スピーカーは音がこなれるまで相当な時間を掛けてエーシングする必要があるので、中古の方が扱い易いのだという。

しかし元々完成度の高い物が熟成して、主人の命令に忠実となり、文句の付けようがない状態にまで達した為、逆にもどかしさを感じてしまう。

仮にクズ子が清楚でおしとやかな女だったとしたらどうなのだろうか。

恐らく自分もそれに合せなければならぬので疲れてしまうかも知れない。

人類とは、憤りやフラストレーションなど、何らかの刺激がなければ生きて行く事の出来ない下等動物なのだ。

「もひもひい・・・」

「アッ、もしもし駕籠君、あのジャズクラブ行くて話でしょ。水曜か木曜ならバイトないから・・・」

「あれはな、吉祥寺にある古いジャズ喫茶なんだわ。もっとお洒落なクラブ探しとくから、またな。」

「エッ、そんなお洒落なお店じゃなくてもどこでもいい・・・」

バイトっていえば、池澤の奴はどうしているのか。退屈凌ぎにちょっと会って、からかって来るとするか。

池澤雅史は高校時代のサッカー部の後輩なのだが、勉強が嫌いだと口癖のように言っていたあいつが、突然猛勉強を始めて、難関といわれている自分の大学に滑り込みで

入学してきた。

でもやはり生来の勉強嫌いからなのか授業には殆ど出ず、毎日バイトに精を出しているらしい。

深夜の方が時給が高いからと、渋谷のパブで夜中から朝まで8時間、週5日も働いていると聞いた。

電話で場所を確認してから渋谷駅で降り、宮益坂を少し上って左に折れたところの、雑居ビルの地下に終夜営業のパブがあった。

店内へ入ると、我が後輩が6名ほど座れるカウンター内で、忙しそうに動きながら出迎えてくれた。

池澤の勧める通り、食器の洗い場に最も近い右端の席に座る事になった。

「暫くぶりですね、先輩。お飲み物は何にしますか。」

「バランタインの17年もの……あるよな。それ、ボトル入れとくわ。薄い水割りにしてな。」

「はい、ありがとうございます。中身が減ったら足しときますから……へへへ。」

「おう、さすがは可愛い後輩じゃな。苦しゅうない、苦しゅうない。」

「ところでお前さ、学校どうしてんのよ。」

「うん、バイトが忙しくてなかなか行けないんですよ。」

「まあ俺っちも半年以上行ってないから、他人の事とやかく言えないんだけどな。」

「えー、中退するんですか。」

「そんな気はねえよ、やる気がないだけ。で、お前の方はどうなの。」

「僕は6年か7年掛けてでも卒業するつもりですけど。」

「サラリーマンになるんだったら、ちょっと不利じゃね。」

「でも一応肩書きだけは欲しいんで……そのために入った大学だ」

し……」

「それじゃあよう、見掛け倒しのピーマンと変らねえじゃん。夢がないねえチミには夢っちゅうものが……」

「僕の夢はランボルギーニのオーナーになる事なんですよ。」

「そのためにバイトしてるんだ。」

「いま乗ってる中古車が、エンジン吹かし過ぎてオシヤカ寸前なんですよ。それでバイト代貯めて、耐久性の高いロータリーエンジン車に換えないといけないんで。」

「ホント、呆れ返ってものが言えないぜ。お前とかクズ子みたいに自宅から通ってんのに、毎日バイトやってる奴が多いから失業者が増えるんだろ。」

「お上が学生バイト禁止令とか発布すればいいんじゃないかな……
・へへへ。」

「そんじゃあ、俺様が勅令を制定するから、おまいは今日限りでクビにしてやんよ。」

「でも結局、失業率は下がらないような気がするんですよ。多分、闇バイト斡旋業者とか出てきて、こういう店に紹介をしたりして、きつと闇稼業だから時給も5割増くらいになったりして、願ったり叶ったりだったりして、へへへへ。」

「なんたる不埒な……お前をそんな後輩に育てた覚えはねえぞ。」

「先輩がよく言っていた不条理ってやつじゃないですか。エへへ。」

「マジな話さ、今の日本に最も必要且つ焦眉の急とされている課題は、如何にして賃金奴隷を解放するかという事なんだ。」

その為には労働者が自らの置かれている立場を自覚し、主体性の発現としての革命を勃発させなければならんだ。

愚眠を貪る労働者階級と小市民階級を覚醒させ、政治への直接参加に駆り立てる示威行動こそが革命運動なのだ。

それは百姓一揆であろうが、ルンペン・プロレタリアによる武装蜂起であろうが、方法論は一切問題視されない。

しかし21世紀における大日本革命とは、フランスやロシアとは全く趣を異にしている。

ただ単にパンとミルクを求め、専制君主を打倒するような単純なものではなく、複雑にして高度なテクノロジーが要求される。

人間の持ち得る、知性・理性・哲学・或いは形而上学的能力までも駆使して、この日本で演じられる事になるのが、未だ類例をみない今世紀初の革命または維新なのだ。

その革命の炎は日本を焦土と化し、後に日本発の偉大なる国家社会主義革命として永久に語り継がれるのだ。

そしてその不世出の天才たる指導者こそが……
……

「先輩、ペース早過ぎ……全然おつまみも食べないで……」

「真のスコッチ通つてのはだな、美酒の味わい方を善く心得ているから何も食わんのだよ。」

「悪酔いするから、ナチズムとか言い出すんじゃないですか。」

「チミねえ、国家社会主義ドイツ労働者党の事なんか言っていないちゅうのお。」

「先輩は高校時代、オーバーヘッドシュート失敗して何度も頭打ってるし。」

「もしかしてチミは俺様の必殺踵落としを食らいたいのかに。」

「もうボトル半分以上飲んじゃって……」

この店は12時を回ってからがピークのようで、池澤も忙しくて自分の相手をする暇がなさそうだ。

テーブル席とカウンターが満席に近くなった頃、空いていた自分の隣の席へ、ショートカットに白いワンピース姿のOL風の若い女が座った。

池澤は気を利かせてくれたのか、自分を高校・大学の先輩だと紹介し、その女と会話するきっかけを作った。

「僕は後輩を訪ねて、今日始めてこの店に来たんですけど、ここへはよくいらっしゃるんですか。」

「あっ、そうなんですか、あたしも今日始めてこのお店に入ったんですよ。会社の飲み会の帰りだったんですけど、電車に乗り遅れてしまったもので、朝まで時間を潰そうかなと思って。」

「へー、それじゃ渋谷にある会社で働いてるんだ。」

「うん、割と有名な会社で受付のお仕事をしてるの。有名人とかも結構沢山来社するから飽きないんですよ。」

でも受付の女の子って10人位いるんだけど、あたしは新入社員で同期の子は一人もないの。

その部署の上司は男の人で3人の娘さんがいるんだけど、とても優しくてあたしを実の娘みたいに面倒見てくれるんですよ。」

「ふーん、女性が多い職場っていうのも大変そうだね。」

「うん、そうなの。特に2年か3年先輩がすごい意地悪な子ばかりで、毎日服装がどうか接客態度がどうか言って苛めるの。」

一番年上の責任者が30代の主任で、その人がとてもしっかりした方なので悩みを打ち明けたりとか、お仕事を教えてくれるので助かってるの。

でもその主任さんがいない時になると、意地の悪い子が集まって来て化粧が濃過ぎるとか苛めるの。」

「えー、何かよく分からないけど、テレビドラマみたいなんだねえ。」

「

「うん、ドラマなんてあんなのまだ楽なほうだと思う。この間なんか食堂で聞こえよがしにあたしの事を体臭がきついとか、

毎日お風呂に入っていないとか、毎日同じ服で出社して来るとか、男性社員がいる前で喋ってるのを聞いたの。」

毎日お風呂に入って、毎日お洗濯もしてるのに、嘘ばかり吐く意地の悪い子たちだらけなの。」

「へー、そりゃあひどいね。」

「先輩の男性社員から聞いたんだけど、その子たちってみんな色々なところ整形してるらしくって、毎年夏冬休みが明けると別人と間違えちゃうんだって。」

中には新宿で夜の変なバイトしてる子もいるらしいの。その人ははつきりとは言わなかったけど、多分風俗嬢やってるんだよ。

それからね、横須賀に空母が寄港すると必ずお休み取る子がいるんだって。すごい不潔だよな。

あたしは良い大学出てるから、その内きつと秘書課かどこかに配置転換されるかもしれないけど、他の子たちってFランしかないから駄目だと思うの。

だからそれまでの辛抱だと思って我慢して頑張ってるの。」

「あゝ、そうだね、頑張ってるね、僕も陰ながら応援するから……」

「あつ、あの、あたし、井上良子です。ケータイの番号とメールアドレスの交換したいんだけど、お持ちでしょ。」

「えゝと、いま電源切ってるんで……」

「それじゃちょっと見せてくれれば、赤外線とかで簡単に交換出来ると思うから。」

「僕はケータイのこと詳しくないんで……一応渡しますけど……」

「えゝと……同じ電話会社の同じメーカーじゃん、簡単に出来るよ。駕籠隼人さんね、素敵なお名前ね……はい、完了。」

「まあ、親が付けた名前だけど……」

「もう始発出てる時間だから帰るね。メール必ず送るから。」

「あ、まだ暗いから気を付けてね。」

「今日はどうもごちそうさまでした。電話するから電源入れて置いてね……じゃ、おやすみなさい。」

「あ、おやすみ……俺のおごり……」

かよ……」

「おゝい、池澤っちゃゝい、助けてくれやゝゝゝ。」

「このドスケベがゝゝ、へへへへへ。」

「お前が紹介なんかするから、お前さえいなければあゝゝゝゝゝ。」
「結構いい女だったじゃないですか。」

「なんで俺が愚痴聞いてやんなきゃならん訳よ。この世の地獄だゝ
祟りじゃあゝゝ今世紀最大の悲劇だあゝゝゝ。」

「御祓いでもして貰ったらどうですか、へへッ。」

「あつ、そうだ。御祓いていやあ、あの娘……誰だっけ、
お前の友達で巫女のバイトしてる奴でさ。」

「あゝ、都築冴子ね。最近会ってないんで、いま何のバイトやって
るんだか。」

「確か巫女ってのは、生娘にしか出来ないんだよな。」

「ナイナイナイゝ、そんなの昔々の御伽噺ですよ。」

「いや、俺の見たところ、あいつは明らかに新品に違えねえ。」

「僕は中古車専門だからどうでもいいけど。」

「俺の目は誤魔化せても、背中のコイツが総てお見通しなんだよう
ゝゝゝ。電話番号教えろやゝ。」

「生き地獄、女地獄に堕ちますよ、先輩……エヘッ。」

「いや違うだろ、俺は禊をしたいだけなんじゃ。」

「そうだ……どうしてもあの巫女娘だけは手に入れなければ
ならない。」

池澤にその巫女さんのケータイ番号を教えてもらい、数日間敵地攻

略の作戦を練っていたのだが、自分には男としての重大な欠陥がある事に気付いた。

巫女さん攻略のための必須条件ともいうべき自動車がない。即ち自分はペーパードライバーだったのだ。

クズ子みたいに食い物だけ与えておけば、尻尾を振ってついてくる様な女なんて世の中にはそうざらにいない。

今時古風なおさげ髪に、小柄で少しぼっちゃりとした色白の巫女さん。ちょっとだけ会話をした事があるのだがとても賢くて身持ちが固そうだ。

甘い言葉には乗って来そうもないので、さりげなくスポーツカーの助手席にエスコートして、映画や音楽の話をしながらカーオーディオのポリウムを上げる。

更に相当な濃い演出をしない限り、彼女の閉ざされた心は自分の方に向けてくれそうにない。

1年ほど前に車の購入を両親に勧められたのだが、話が噛み合わないののでそのままにしていたのが逆に良かったみたいだ。

新車が欲しかったため、欧州車では予算オーバーになってしまい、いずれその内にと考えていたのだが、今は中古車でも良いと考えを改めるようになった。

中古車市場は池澤が詳しいので、あいつのバイト明けに会って相談してみようと約束をした。

日曜日の早朝、原宿の喫茶店で池澤と待ち合わせ、マニアックな会話を始めた。

「スポーツカーだったら、ちょっと古いけどランチャ・ストラトスとか、ラリー037とか、デルタS4なんかが超カッコイイですよ。ね。

あと昔のマセラッティのV6メラクとV8ボラのミッドシップとか、安いのだったらアルファ・スパイダーなんかいいですよ。

フェラーリとランボルギーニは少し高過ぎるのでおいと……

・・・・・・」

「あのなあ、イタリアン・スーパースポーツじゃなくって、俺はブリティッシュ・ライトウェイト・スポーツが好きなんだよ。」

「あ、そうなんだ。英国車だったら、ロータス・ヨーロッパとかエランなんか超カワイイですよね。」

「古過ぎると維持費が大変そうだから、比較的新しいやつな、やっぱり日本製エンジン搭載のロータスとか、後はTVRの直6とかだよな。」

「ジネッタなんかどうですか。コスワースチューンの直4エンジンがあったような・・・・・・」

「そんなレーシングカーみたいなのは駄目だな。乗り心地が良くてそれでいてアクセル踏むとカッ飛ぶ様なやつじゃないと。」

「うーん、じゃあロータス・エスプリターボなんか・・・・・・」

「007に出て来たボンドカーねえ、かっこいいんだけどやっぱりミッドシップよりも、荷物が載せられるフロントエンジンの方がいいかなとか考えちゃうんだよな。」

「それじゃあ、TVRタスカンSに決まりですよ。2シーター・タルガトップ・4リッター直6の400馬力で値段もお手ごろ。」

「うんうんうん、これは女心をくすぐる可愛いデザインだよな。やつぱこれしかないよな。」

「そんじゃ、早速手配しますね。」

「あと、お前さ、巫女さんの話はオフレコな。」

「僕の口が固いのは先輩もよく知ってるでしょ。高校時代の部室であの子をとか・・・・・・エヘッ。」

「軽すぎるんだけど・・・・・・」

池澤の親戚が経営しているという中古車チェーン店には豊富な在庫があるらしいので、最も程度の良いものを選んでもらい購入するこ

とに決めた。

契約と手続きも済み、いよいよ我が愛車TVRタスカンSの初ドライブが出来た日になった。

店の人に幾度となく注意をされたのだが、この車はハンドルに遊びがなくレーシングカーに近いような、

ロック・トゥ・ロックが1対1、4くらいなので、くれぐれもステアリング操作には気を付けるようにとの事だった。

しかし自分は最初に助手席に乗せる女性以外のことは眼中になかった。

今までドライブといえばレンタカーだけだったし、こんな超弩級スーパースポーツのハンドルを握るのは始めての体験だ。

箱根越えを目指して飛ばして行くと、なるほど店員の言った通りステアリングレスポンスが異常なくらいクイックだ。

シリンダー当たりの容量がでかいにも関わらず、アクセルを少し踏み込むだけで自社製直6ツインカムが強烈に吹け上がる。

その官能的ともいえるエクゾーストノートとメカ音のハーモニーは、カーオーディオの必要性を全く感じさせない。

2時間ほど走らせただけで、相当な緊張を強いられたため疲労が激しく、その日は早々に箱根を下って帰ることにした。

都築冴子のケータイ番号は聞いてあるので、実直な人間を装うのであれば直接掛けてしまえば良いのだが、それでは余りにも能がない。ここはやはり池澤に仲介させるのが最善の手段だろう。

そこで、池澤から冴子に電話を掛けさせ、自分が折り入って相談したい事があるので電話を貰えるように頼む作戦に切り換えた。

純真で誠実そのものに見える巫女・冴子だからこそ、この計画は確実性が非常に高いものと思われる。

既に池澤からの電話を受けているはずなので、今日中には自分のケータイ着信音が鳴るだろう。

それから約3時間後、思った通り『愛の夢』が鳴り響いた。しかしこれは公衆電話から掛けていているらしい。

「もしもし、駕龍ですが。」

「あ、もしもし、わたくし都築と申しますけど、池澤君に電話番号を聞きまして………駕龍さんとは今年のお正月に一度お会いしていますよね。」

「ああ、わざわざすみません。僕は高校・大学を通じて池澤とは親しいんですが、都築さんに是非ともご相談というか、聞きたい事があったものですから。」

「はい、わたくしに分かる事でしたらいいんですけど………どんな事なんですか。」

「都築さんは巫女さんをしてらしたので、そちらの方面は詳しいのではないかと思ったんです。」

実は私事なんですけど、御祓いという神事はどんな手続きを踏んでお願いしたら良いのか、

回りの誰に聞いても的確な答えが返ってこなかったものですから、巫女さんをしておられる都築さんならばご存知かと思ひまして。」

「わたくし現在は巫女はやっていないんですけど、そうですね知人に尋ねてみれば分かるかも知れないですけど。」

駕龍さんご自身の御祓いといいますと、具体的にはどのような事なのか解かりかねて………」

「ええ、お恥ずかしい話なんですけど、自分はここ最近悪夢にうなされて、眠れぬ日々を送っているんです。」

多分何か邪悪な者の憑依ではないかと思うんですけど、顔ははつき

りとは見えないのですが、

ショートカットで白いワンピース姿の女性が現れて自分の首を絞め、苦しくて息が出来なくなるという現象が続いているんです。

テレビでは似通ったドキュメントを何度か見たことがあるんですけど、きっと自分も崇られているのではないかと考えまして。

そこで、出来ましたら都築さんと直接お会いして、お話を伺うのが一番良いと思ったのですが。」

「そうなんですか、それは大変ですね。わたくしも何とかお力になればいいのですが、お祓いについては知識がありませんので、知人に聞いてみない事には何ともご返事のしようがないんです。」

「はい、お手数をお掛けして申し訳ありません。またお電話して頂くか、お会いしてお話を伺えるのであれば何時でも構いませんので宜しくお願いします。」

「はい、近い内に必ずご連絡致しますので。」

「ええ、お忙しいところすみませんでした。」

「では失礼致します。ごめんください。」

「あ、はい、では……どうも………」

これはまずい。作戦は大失敗に終わってしまったのか。

敵は難攻不落の要塞に立て籠もって攻撃をかわしているとしか考えられない。

公衆電話を使うとは何という慎重で懐疑的なのか、はたまた猜疑心が強いのか。

これは絶対に長期戦・持久戦に持ち込まなければ、壊滅的敗北を喫するのは目に見えている。

急いては事を仕損じると肝に銘じなければならない。

愛車TVRタスカンSはかなり高度なドライビングテクニックが要求されるので、少し腕を磨いておかないと車に振り回されてしまう。冴子に乗せて、もし事故でも起こそうものなら計画は総て水の泡だ。高速道路や箱根だけでなく、渋滞した道や坂道発進も初心に返って練習しなさいといけないみたいだ。

この高性能車にとってはちょっと酷なのだが、今日は都内をのろのろと走ってみることにしよう。

渋滞した道はやはり退屈なので、R・シュトラウスの『ドン・ファン』をフルボリウムで聴きながら、新宿駅近くへ差し掛かった。サンドイッチでも食べながらと思い、買い物をするため駐車出来そうな場所を探していたところ、駐車場付きのコンビニがあったのでそこで買い物済ませることにした。

ミックスサンドとコーラを買い、車に戻りエンジンを掛けようとしたその時、助手席の方向から甲高い声が響いた。

「隼人おおーoooooooooooo、隼人でしょ。」

最悪だ。あの女、愚痴っぽいOLの井上良子だ。更にその黄色い声とピンク一色の派手な服装に目眩がした。

「ねえ、隼人お、これって外車？すっごいカワイイよね。外車なのにどうして右ハンドルなの？乗せて乗せてえええ、早くうウウウ、ドア開けるとこないよ。ねえ、早くうウウ。」

「ドアノブはないから……いま開けるよ。」

今日はぽかぽか陽気の良い天気だったので、着脱式トップを外してサイドウィンドウも両方全開にしていたのがそもその間違いだっ

た。

しかしこの馬鹿女はまだ付き合ってもいないのに、いきなり他人様

を呼び捨てにした上、車に乗せろなどと全く図々しい奴だ。

「えー、変なのー、真中にドア開くスイッチが付いてるんだあ。ねえねえ、外車なのにどうして右ハンドルにしたの。すっごいカッコ悪いよ。」

「元々、右ハンドルなの・・・」

「エエー、だって外車は左ハンドルじゃないと変じゃん、すっごいダサイじゃん。」

このドン百姓がなにをほざくか!!! 馬鹿馬鹿しいので何とか話を逸らせようとしたが、気が動転していて何も思い付かなかった。

「ねえ隼人さあ、何で電話してくれないの、メールでもいいのにさ。」

「そっちからするって言わなかったつけ。」

「お仕事が忙しくて出来なかったの、隼人は暇なんですよ、毎日欲しくて待ってたのに。」

「俺もさ、色々和多忙な身なんだよ。」

「ねえ、早く車出してよ。海に行こうよ。」

「このスポーツカーは特別仕様だから、潮風にあたると駄目になっちゃうの。」

「六本木行ってさ、お食事してから湘南にドライブに行こうよ。」

「だから、海はダメなんだってのに。」

「どうでもいいから、早く六本木。」

仕方なく六本木方面に向かい、良子に指図されるままフランス料理店の前に車を止めた。

そこは以前雑誌で見た事がある、有名なシェフがオーナーの一流店だった。

ギャルソンの案内でテーブルに座り、フルコース料理とソムリエお

奨めのグラスワインを注文した。

恥知らずな女、良子は、社員食堂で食事をする感覚で一人はしゃいでいた。

「でもさあ、最近フレンチもちよつと飽きて来たかなあゝて感じなの。やっぱりあたしは学生の頃からスイス料理店専門だったからかなあ。

うちの会社の女の子なんかさ、今時流行らないイタメシの話しかないんだよ。

みんな田舎者だよ。パスタやピザでお腹いっぱいになればいいって子しかいないんだ。」

田舎者はお前なんだ、フランス・スイス料理は北イタリア料理が発展したものなんだ、イタメシは南イタリア料理が多いからそれはそれで最高の料理なんだ……とか言って、グルメ漫画の主人公に変身して魚の餌にしてやりたかった。

「あ、そうだ、さっきカーステで掛けてた音楽ってなんだったつけ。学生のとき聴いた事あるんだけど。」

「あれはな、『カルメン』だよ。俺はあんまり好きじゃあないんだけどな。」

「それ知ってるよ、有名なイタリアオペラだよ。イタメシは好きじゃないけど、イタリアオペラは最高の芸術だよ。」

この、知ったかぶり女……誰がお前なんぞに本当の事なんか教えてやるもんか、一生恥かいて終れ……とか言って、女嫌いでペシミストの実存主義哲学者に変身して袋叩きにしてやりたかった。

「イタリアオペラもよく聴くんだけど、やっぱりあたしはポップスが

一番好きかな、アメリカンポップスってノリがいいよね。『愛の讃歌』とか『マイ・ウェイ』とか昔の曲が好きなんだけど、隼人はこれって知らないでしょ。」

「ああ、俺はアニソンと演歌しか聴かないからな。」

この、知ったかブリブリ女……そりゃあ、エディット・ピアフとシャルル・アズナブールの書いたシャンソンをブレンダ・リーとかフランク・シナトラが英語で歌っただけだろ……とか言っつて、新春山村シャンソンショーに変身してフルボッコにしてやんよ。

恐怖のお食事会も終了し、再び車に乗り込んだが、果たしてこの知ったか女は俺を無事解放してくれるのだろうか。

「ワインで少し酔っちゃった。どこ行こうかなあ、東麻布か西麻布か……やっぱあたしの庭の渋谷に行つて、隼人。」

この馬鹿女……お前は俺の何なんだよ、すっかり女王様の気になってやがる。

半分諦め気分で駅近くの駐車場を探し、良子の指図する通りに宇田川町周辺をブラブラと歩き回り、公園通りにあるカクテルラウンジに入った。

自分はドライマティーニを良子はモスコ・ミュールを注文して、良子が勝手に乾杯の音頭をとった。

「今日はお休みだったから、隼人に逢えてほんとに嬉しかったよ。もう絶対にあたしと隼人は離れられない関係だよな。」

きつと親指と親指が繋がっていたから偶然回り逢えたんだと思うの。これって運命だよな。」

「へへへ、もし小指と小指が赤い糸で結ばれてたら、結婚しなきゃ

あならない運命なんだぜ。」

「結婚なんて古臭いこと考えてんだね、隼人は。それってやっぱ演歌の影響なの。」

「結婚が古臭かったら人類は滅亡してるけどな。」

「お掃除と洗濯とご飯とあと色々、全部隼人がやってくれたら結婚してもいいよ。」

「まあ、それはお前が年収3000万くらい稼ぐ女社長か何かだったら考えといてもいいけどな。」

「女性は子育てとかで忙しいから仕事はしなくてもいいんでしょ。」

「お前に子育てなんて出来んのか。」

「出来るに決まってんじゃない。」

「出産の経験があるような口振りだな。」

「出産は女性の仕事で、男は外で働いて帰って来てから、一緒に子育てをするのが最近の常識なんだよ。」

「俺はさあ、ガキって大嫌いなんだよ。」

「それって、おかしいんじゃないの。すっごい変ってるよ。」

「犬や猫の仔だったら、何匹いても構わないけどな。」

「それって変だよ。動物なんて何もしてくれないじゃん。餌代がかかるだけでさ。」

「後な、俺は動物が嫌いな奴ほど大っ嫌いなものはないんだよ。」

「それってさ、子供を産めないからそんな変な考え起こすんだよ。」

「だから、お前はガキを産んだ事があるのかって聞いてんだけど。」

「そんなの関係ないじゃん。」

「お前さ、子供いるんじゃないのか。」

「隼人がそんなに疑り深い人だなんて知らなかった。」

「後な、俺は嘘を吐く奴くらい大っ嫌いなものはないんだよ。」

「隼人も会社の女の子とおんなじ、あたしを苛める事しか考えていないの。」

「返事に窮すると、疑われても仕方ないんだぜ。」

「意地悪……どうしてあたしをそんなに苛めるの……」

「……」

「いや……別に苛めてる訳じゃ……」

「

良子は遂に最終兵器の発射ボタンに手を掛け、口の達者な駕龍を黙らせてしまった。

駕龍は過去に一度だけ同様の緊迫した場面を経験した事がある。相手は森下久美子、クズ子だった。

「隼人にもっと、あたしのこと知って欲しいの……あたしのこと分かって欲しいの……」

「まあ、俺は他人の事を詮索するのは好きじゃないんだけど……」

「きつと隼人はあたしのこと好きになってくれるって信じてるの……」

「……別に嫌いってわけじゃ……」

致命傷を負わされた駕龍は良子と共に気まずい雰囲気のまま公園通りへ出て、無言で歩き始めた良子の後に着いて行くしかなかった。そして道玄坂の上り口に入った時、良子の最終兵器による攻撃で大破したと、総てを悟り覚悟を決めた。

それは決して駕龍の本心からではなく、今日の投資を回収しなければ損をするとか算的に考えた結果だった。

しかし、人込みの中、依然として黙りこくって歩き続ける良子を追い道玄坂を少し上った時、突然大きな声で駕龍の名を呼ぶ者があった。

「駕龍く……ん、どこ行くの……」

クズ子だ。そして川上も一緒に男女数名で坂を下りて来たらしい。しかし良子の存在には気付いていないようだ。

当の良子はクズ子の大きな声に気付き、振り向いて自分の目を見たときに彼女の表情が変貌を来していたのがはっきりと見て取れた。そして自分に近寄り耳打ちし、突然家に帰ると言ってそのまま駅の方へ小走りに向かい、あっという間にその姿は見えなくなった。何かなんだか訳が分からず呆氣に取られていると、少し驚いたような面持ちで、クズ子と川上が自分の傍に来てこの様に言うのだった。

「駕龍君、ごめんね、お邪魔虫だったみたいね……………」

「いや、別に何でもないんだけどさ、帰るところだったから。あつ、俺よう、車買ったから帰るんならお前送ってってやろうか。」

「キヤーーマジで〜〜、マジマジマジィ〜〜」

「2シーターのスポーツカーだから川上には悪いんだけどな。」

なんとなくばつが悪いので、クズ子を出血サービスで車に乗せてごまかそうとしたのだが、

今日自分は損をしたのか助かったのか、その後ずっと考えていたが結局どちらでもよいという結論しか出なかった。

ただあの時、何故良子は突然帰ったのか、それと終始無言で俯いていた川上の顔がなぜか不可解で気に掛かった。

翌日、疲労困憊しきって昼過ぎまで死んだ様に寝ていると、突然の着信音に叩き起こされた。

例によって例の如く、クズ子からだった。

「何だよ。」

「あのさ、お家にいるんでしょ、話があるから出て来て。」

「俺は話なんかないけどな。」

「もうすぐ井の頭公園に着くから、車で即来てね。じゃ。」

「おいっ、絶対に行かんからな。」

「ナンバープレート写メってあるんだから。すぐ来て。」

「エッ……」

そのうち、家に押し掛けられるのではないかと怖気づいた駕籠は、顔面蒼白のまま井の頭公園へと向かった。

クズ子は公園のベンチに腰掛け、辺りをキョロキョロと窺いながら駕籠の到着を待っていた。

そして駕籠の姿を発見すると立ち上がり、手招きをしながら大きな声で呼び寄せるのだった。

「遅かったじゃん。」

「エンジンの吹けが悪くてな。」

「あの車すごいうるさいから昨日は何にも話が出来なかったじゃん。」

「ナンバー写メったてのはマジか。」

「あの女は誰なの。」

「お前にそんなこと言われる筋合いはねえな。」

「あたしに逢いたくない理由が昨日よく解かった。」

「ふーん、頭いいじゃん。」

「どこに行くつもりだったのか知ってるよ。」

「なんだよ、円山町の小料理屋知ってたのか。」

「小料理屋のわけないじゃん、嘔吐き。」

「お前にだけは嘔吐いた事ないけどな。」

「最近あたしを避けてるのが嘔吐きの証拠なんだから。」

「お前さあ、夫婦じゃないんだからな、俺が誰と食事しようが酒飲もうが関係ないだろ。」

「だから食事とかお酒とか嘔吐してるじゃん。」

「お前は何が言いたんだよ。」

「男と女があんなどこ行けば、する事って他にないじゃん。」

「俺とあいつが腕組んで円山町を歩いてたってんなら話は分かるけどな。」

「腕組むとか手をつなぐとは限らないでしょ。」

「どこの馬の骨かも知らなくて言ってるのが分からんのか。」

「じゃ、行きずりの女なんだ。」

「前に一度会っただけだよ。」

「そうなんだ………そういう仕事してる女なんだ。」

「馬鹿かよ、お前は。」

「やっぱそうなんだ。」

「病院行けよ。」

「駕籠君はあたしと一度も腕を組んだり手をつないだりしてくれた事ないよね。だからあの女も同じ扱いなのね。」

「あの車買った大きな理由の一つはな、お前を病院に運ぶためなんだよ。」

「駕籠君が嘔吐きだから、あの女は昨日慌てて帰っちゃったんじゃない。」

「だからな、新車じゃもったいないから、お前とおんなじ中古にしたんだよ。」

「一体何人の女の真心を踏みにじったら気が済むの。」

「中古で慣らし運転済みだからエンジン快調、俺が時間を掛けてエンジングしてやったお前と同じく超スムーズ。」

「そうやって話し逸らして………いつもそう………あたしを傷付けて………苛めて楽しんで………」

「お前のリーサルウェポンは既に封印してあるから、二度と通用しないのは分かってるよな。」

た。

食い物がなくなってからもタバコをふかしながらずっと外を眺めているので、いい加減我慢の限界に達した自分は、一気に質問攻めを仕掛けることにした。

「お前ずっと素っ惚けてるけどな、もしかするとあの女の素性を知ってんじゃないのか。」

「詮索好きな奴が大嫌いだったのは、お前の口癖だったよな。」

「得体の知れないあの女の正体が知りたいだけなんだよ。」

「それで、俺の腹の中を探ろうと詮索してた訳だ。」

「世間様に知られたらまずいような関係だって言いたいんだな。」

「随分大袈裟に考えてるんだな。」

「俺の考察した所によると、お前とあの女は明らかに肉体関係で結ばれている。」

「いや、お前らがホテル街に行ったのは一度や二度じゃないはずだ。誰の目から見ても間違いない。」

「あの女がどんなに迷惑だったか知らんだろ。たまたま会ってあそこを歩いていただけなんだ。」

「裁判になってもそれは通用しないな。たまたまあの夜は行かなかっただけなんだろ。」

「神に誓って言うが、あの女とは関係を持った事などない。」

「狼少年は神によって裁かれたんだ。お前と同様にな。」

「それは俺の言う台詞だろ。絶対にお前はあの女を知っている。」

「車買ったから毎日でも楽に通院出来るだろ。」

「ま、期待はしてなかったけどな。お前が白を切り通したのが、何よりの動かぬ証拠になった。」

「お前が悪趣味だったのが分かったよ。あの手のケバい年増が好みだったんだな。」

「江戸時代には二十歳でも年増だったわけだけど、俺はどっちかというとプチ・ロリの傾向があるかも知れんな。」

「そうか、お前みたいなプチ・ブル家庭のブルジョワジーはみんなロリだったのか。」

「いい事思い付いたわ。俺の葵の御紋入り印籠にお前の写真を貼って魔除けにするわ。」

「印籠じゃなくて、お前がいつも自慢してる家紋入りのケータイだろ。それにお前の家紋は葵の御紋じゃないよな。」

「その通りだよ、明智くん。待ち受け画面にお前の写真を貼って、あの女が現れたら、この紋所が目に入らぬかあゝてな。」

「あまりお利口さんとはいえないな、プチ・ブル小林少年。」

「いや、我ながら名案だと思うよ。参ったかね、明智くん。」

「どうせ俺の写真なんか持ってないんだろ。まあ、せいぜい頑張れ、ブルジョア二十面相君。じゃあな、いつもごっそさん。」

「ランチ食ってピザ食ってケーキ食って・・・・・・・・・・・・・・・・・・
・・・・・・・・・・・・・・・・・・あけち君・・・・・・・・・・・・・・・・・・」

カフェに長居をするともたクズ子のレーダーに引っ掛かりそうなので、早々に退散しようと考えていたところ、着信音が鳴った。
公衆電話・・・・・・・・・・・・・・・・・・間違いなくあの娘からだ。

「もしもし、駕籠です。」

「もしもし、先日お電話した都築ですが。」

「あ、こんにちは、何か分かりましたか。」

「ええ、その件についてなんですけど、お電話では説明しにくいのではと思ひまして。」

「ああ、それではどこかで落ち合ひしましょうか。今日のご都合は如何ですか。」

「はい、今大学近くの駅前にいるんですが。」

「あつ、そうですか。僕も大学のすぐ近くにいるもんですから、ど

こかの喫茶店とかどうですか。」

「えーと、大学のすぐそばに公園があるのご存知ですか。」

「はい、知ってますよ。それじゃあ、そこで待ってますので。」

「これからバスに乗って、30分くらいだと思います。」

「はい、ではお待ちしますから、急がないでのんびりと来て下さいね。」

「はい、すぐに参りますので……では失礼します。」

「あ……はい、ども。」

魚は網に掛かった。

こうしてはいられない、ビールを飲み過ぎたので臭いを消してから行かなければ。

駕龍はモカエスプレッソとアイスココアを急いで注文し、一気に飲み干したあと洗面所で顔を洗い、すぐさま車に乗り込んだ。

車で行けば5分と掛からない場所なので、途中薬局に寄ってオーデコロンを買い、体中に振りかけた。

公園に着いた後、屈伸運動をしたり深呼吸をしたりして、近い将来の恋人候補の到着を待ち侘びていた。

そして20分ほどすると、おさげ髪に白いブラウス、少し長めでプリーツの入ったブルーのスカートを身に纏った巫女娘が現れた。

「遅くなってすみません、待ちましたか。」

「僕も5分くらい前に着いたんですよ。わざわざどうもです。」

「いいえ、大事なお話だと思いましたので。」

「それで、何か分かりましたか。」

「ええ、それが大変申し訳ないんですが、わたくしが巫女を勤めていた神社ではお祓いという神事はしていないそうなんです。

知人に聞いたところでは、他の神社は出張をしたりとかしているらしいのですが、そのほとんどが土地のお祓いなのだそうです。

その知人の言うには、駕龍さんのような場合は神社とは全く無関係な霊能者みたいな方が、その様なお仕事をなさっているそうなんです。」

「ああ、そうですか。そう言われてみたらそうかも知れませんか。」
「なんとかお力になればと思ったのですが、却ってご迷惑をお掛けしてしまっただけみたいで……。」

「あ、全然そんなことないですよ。実を言うと不思議な事にここ数日間、その悪霊は僕の前に現れなくなっただけですよ。」

「えー、それは良かったですね。悪霊は退散したんでしょうか。」

「それが、確か先日冴子さんとお電話で、お祓いについてお願いをした翌日からだったみたいなんです。」

きつと冴子さんの持つ清らかな霊力が、魔物を封じ込めたのではないかとしか考え様がないんです。」

「いえ、わたくしはバイトで巫女をしていただけですので、霊力なんて持ってないですよ。」

「霊力とはオカルト的な霊能力とは全く違うんで、生まれ持ったものの一部だと思うよ。」

大人になってからも、冴子さんの様に清らかで心正しく美しい女性には常に宿っている精霊による力だと思うんだ。」

「わたくしは違うんですけど、神様とわたくし達を結ぶ聖霊は存在すると信じているんです。」

「そうだね、神様はいつも冴子さんの事が気掛かりで見守ってくれてると思うんだ。」

「いいえ、わたくしだけでなく、神様は総ての人々を見守っているんです。」

「うん、僕もその通りだと思う。神なくして僕達は存在できない、だから感謝する気持ちを忘れず、神への忠誠をいつも心に誓って生きている。」

「でも、わたくし……一つだけちょっと違うような気がしまして……。」

「えっ、何が、何でもいいから言って欲しいんだけど。」

「神様は人々に忠誠心の要求はなさっていないのです。わたくし達一人一人が神様の御威光の下に跪き、永久に従う事を誓うのだと思うのです。」

「そうだね、僕達みんなが自らの意思で決定しなければいけないよね。」

「あのう、失礼だとは承知しているのですが、一つだけ駕籠さんにお聞きしたいのですが。」

「ああ、何でも聞いてね。」

「あの、駕籠さんはどちらかの教会とか、団体に属してらっしゃるんですか。」

「いやいや、僕は読書が趣味なもので本から得た知識だけでお話ししてるんだけど。」

「そうなんですか、少し安心しました。」

「えっ、安心していうと・・・」

「わたくしは文学部なんですが、大学内では様々な学部でカルト教の危険な誘いがあるらしいんです。そういう方ではないと分かって安心したんです。」

「僕はカルト教の誘いには絶対に乗らないので大丈夫なんだけど、あいつらは善人の仮面を被って近づいてくるから、冴子さんも充分に気をつけた方がいいよ。」

「はい、冴子は案外疑り深い方なので、心配ないですよ。」

「そうそう、ひとを見たら泥棒と思え、だからね。でもそんな奴ばっかりじゃないから世の中って面白いんだよね。」

「うん、でも冴子はね、ついこの間だけ騙されちゃったんですよ。」

「え、なになに、誰に。」

「ちよっとアンティークな物が欲しかったから、ネットオークションで落札したんですけど、それが全然書いてある事と違ってたの。」
「それって、なに買ったの。」

「冴子はディズニー映画がすごく好きなので、『白雪姫』の『いつか王子様が』の入っているオルゴールを去年から探していたの。でも届いたオルゴールを開けたら違う曲が入っていたの。」

「それは酷いね。実は僕も騙された経験があるんだけど、そこまでは酷くなかったかな。ところで冴子ちゃんは、他にも『ピノキオ』の『星に願いを』とか、『オズの魔法使い』の『虹を越えて』とかあるんだけど、多分それも好きだよな。」

「うん、それも好きだから探してたんだけど、アンティークでカワイイのだと他になくて騙されちゃったの。」

「古いディズニー映画の主題曲って、ジャズのスタンダードナンバーになってるからよく聴くんだけだね。冴子ちゃんはジャズよりもポップスって感じかな。」

「あ、ジャズって知ってるよ。すごいカワイイ女の人がアメリカで有名だってテレビで観たの。」

「それって、ピアニストじゃないの。」

「うん、そう可愛くてすごくピアノが上手なの。」

「誰だか分かった。女性の大ピアニストっていえば、クラシック界でも同姓の大ピアニストがいるんだけどね。ジャンルは違うけど二人とも日本を代表する最高のピアニストだよな。」

「あっ、駕籠さんてクラシックもお詳しいんですか。」

「どっちかって言うと、ジャズ・ポップスよりクラシックの方が聴く機会が多いかなって感じだよな。」

「じゃあ、もしかすると冴子の買ったオルゴールの曲も知ってるかも。なんかその曲が気になってしょうがないの。」

「どんな感じの曲なの。」

「あのね、クラシックかどうか分からないんだけど、冴子が小さい頃毎週日曜日に行ってた教会で聴いたことあるような、でもとても怖い曲だから開けないようにしてるの。」

「えー、何だろなあ、聴いてみれば判る筈だけど。そうだ、それさ、小さくて軽かったら実物を持って来てもらえないかな。」

「うん、どうしてもその曲が何だか知りたいの。とても小さいオルゴールだから。」

「じゃあさ、今度いつでもいいから持って来てさ……そうだな、冴子ちゃんにジャズの生演奏も聴かせて上げたいからさ、自由が丘にお洒落なジャズクラブがあるんだけど、そこに行ってみようか。勿論、車で迎えに行くから。」

「えー、ジャズクラブなんて冴子行った事ないから、どんなところのかなー。」

「割と大きなホールでピアノトリオの演奏とかが多いんだけど、冴子ちゃんがおねだりすれば『いつか王子様が』なんかも弾いてくれるかもよ。」

「わー素敵ー、楽しみだなあ。」

「今日はもう暗くなっちゃったから、お家まで送ってくよ。あつ、そうだ冴子ちゃんさ、ケータイ持ってたから見せてくれるかな。僕の番号とメアドと交換したいから。」

「うん……はい、これ。」

「あ、なんだ、僕のケータイと同じ電話会社とメーカーだから、赤外線で簡単に交換出来るよ……はい、完了。」

「駕籠さんて、ケータイのこと詳しいんだね。」

「パソコンよりは簡単だからね。それじゃ、車あっちにあるから行こうか。」

美しい熱帯魚は水槽の中で泳いでいる。

世田谷のかなり大きな高級マンションに住んでいる事も判った。

しかし冴子のなんとという可愛らしさ、なんとという可憐で、なんといういじらしい純情無垢な美少女なのだろうか。

冴子の大きな瞳と小さな唇のブラックホールに自分は吸い込まれて

しまったみたいだ。その可愛い声と可愛らしい身振りど、はにかんだ表情は純真な天使としか考えられない。

機は熟した・・・・・・・・・・・・・・・・

川上が言っていた通り、俺はあいつの写真など一枚も持っていなかった。

しかし悪霊井上良子撃退のためには、どうしても川上の写真が必要だ。

これは盗撮するしか手がなさそうだ。デジタルカメラは全く知識がないので、カメラ屋に行って見てくるか。

確かEOSってのがあったから、望遠レンズ選んでもらって、そいつに決定するか。

ん、ケータイの着信音・・・・・・・・・・冴子か・・・・・・・・・・
・・なんだクス子かい。

「なんか用か。」

「下北沢にいるから、すぐ来て。」

「いんや、駄目じゃ。これから人と待ち合わせしてる。」

「ナンバープレート、プリントアウトしたから見れば。」

「エッ・・・・・・・・・・・・・・・・」

畜生め、恐喝罪で訴えてやるぞ。

下北沢でクス子を拾い、結局約束どおり葉山マリーナまで行かされる破目になった。

「お前、陸運局に行ったのか。」

「あつ、探偵屋さんに頼まなくてもいいんだ。それならタダで済むよね、ラッキー〜。」

「悪魔め……………」

葉山マリーナまで時間が掛かるのを知ってか、悪魔は暢気にいびきを掻いて寝てしまっている。

もう彼此3時間ほどTVRタスカンSを走らせただろうか、悪魔が目覚ましてあくびをしている。

「キャー……海、海、海……ヨットがカワイイ……。」

「葉山行って何すんだよ。」

「FMつけて、78.9メガヘルツ。」

「そんなのネットで聴きゃあいいじゃん。」

「ドライブして海を見ながら聴きたかったの〜。」

「お前の好きなJ-popは掛かんねえぞ。」

「ボビー・コールドウエルの『カム・トゥ・ミー』だ〜、素敵いい〜。駕籠君は知らないでしょ。」

「俺様がな、AORの帝王と呼ばれた男だったの知らないだろ。」

「それ、ボズ・スキヤッグスじゃん。」

やつのことで葉山マリーナまで辿り着いたのだが、悪魔はヨットに乗りたいたいと言い出した。

「そんなの知るかよ、調べてから来いよな。もう5時過ぎてるからダメだろ。」

「な〜んだ〜、駕籠君はクルーザーの運転とか出来るのかと思った。」

「アホかよ、そんな免許持ってる訳ないだろ。」

「つままないの〜、じゃ、お食事してから帰ろう。」

「お前さ、こんな遠くまで何しに来たわけよ。」

「今度はさ、朝早く出発すればいいんだよね。」

「お前さ『太陽がいっぱい』て映画知ってるか。」

「知ってるよ……あ……そんな事考えてたんだ、この悪魔め。」

「どっちが悪魔だよ。」

「駕籠君みたいな悪魔が、この間の爆弾テロみたいのやるんだよ、きつと。」

「どこの爆弾テロよ、海外だろ。」

「エ、知らないの、テレビ見なかったの。」

「テレビは見ない主義なんだよ。」

「30人以上の人が亡くなってるとだよ。ほんとに知らないんだ。」

「知らん。それどこだよ。」

「東京じゃん、新聞くらい読んだら。」

「新聞は読まない主義なんだよ。」

「バツカじゃないの。」

悪魔を乗せたドライブはなんとか終り、解放されたのは午後11時過ぎだった。

途中、レンタル店に寄って、古い映画のDVDを借りて来た。タイトルは『女房の殺し方教えます』……だ。

デジタルカメラは、池澤が高性能の望遠レンズ付きカメラを持っていたので借りて、川上を大学から呼び出し、見事30枚以上の全身

と顔写真の撮影に成功した。
これで悪霊退治実行に向け、準備万端整ったわけだ。

冴子と逢ってから3日が過ぎたので、そろそろ誘いをかけてもよさそうな頃合いだ。
バイトはやってそうにないので、今の時間なら家にいるかもしれない。

「もしもし、駕龍ですけど。」

「あつ、駕龍さん、こんにちは。」

「この間のオルゴールの件なんだけど、今日は時間あるかな。」

「うん、大丈夫ですよ。」

「帰りはそんなに遅くならないから。この間止めた所へ迎えに行けばいいんだよね。40分くらいで行けるけど。」

「あつ、あのー、これからシャワー浴びてからなので……………」
2時間後くらいがいいな。」

「うん、オツケー、オルゴール忘れないでね。それじゃ。」

「うん……………失礼しまゝす。」

ウヒヒヒ……………シャワーだって……………
じゃ、俺様もシャワー浴びることにするか……………ウヒヒ。

2時間後、マンションの前で冴子を乗せ、目的地自由が丘までTV
RタスキャンSを走らせた。

20分ほどで到着し、駐車場から歩いて10分ほどの所の地下にある
ジャズクラブへ冴子と共に入った。

丁度ピアノトリオの生演奏が始まる直前らしく、ステージは準備に
追われていた。

予約済みの一番奥にあるテーブルに座り、軽い食事の注文も済ませた。

彼女はお酒が飲めないそうなので、自分もソフトドリンクをオーダーして冴子と合せる事にした。

そして……………

「演奏が始まると音が聞こえなくなっちゃうから、例のオルゴールを見せてくれるかな。」

「うん……………これ。」

「じゃ、開けてみようか……………」

「うん……………ちよつと怖い曲なの。」

「あれ……………」

「えっ、どうしたの……………」

「これ『カルミナ・ブラーナ』じゃん……………」

「『カルミナ・ブラーナ』っていうの……………」

「ああ、20世紀前半の名曲の一つなんだけどね。」

「やっぱりクラシックだったんだ。」

「エ……………でもなんか変な気がする。俺もおんなじで騙されてるから。」

「駕龍さんも同じオルゴール持ってらっしゃるの。」

「ああ、デザインは違うんだけど……………アッ、製造年が同じ1812年だ。一体なんだこりゃ……………」

「なんか怖い……………」

「いや、ただの偶然だよ。気にしない方がいいと思うよ。」

「でも冴子はこのオルゴールに、ずっと何かを感じていたの。でもそれが何だか分からなくて。」

「あのさ冴ちゃん、これをネットで見た時どんな事が書いてあったか覚えてるかな。」

「うん、取り扱いに注意するようにとか、神様がナントカとか・・・余りよく覚えてないの。」

「最初の方に書いてある商品名とか、タイトルみたいなものは？・・・」

「うん・・・確かパンがどうか・・・」

「それってまさか、パンドラの箱って書いてあったんじゃないよね。」

「アッ、思い出した。パンドラ・・・パンドラの箱だったよ。」

「エエ~~~~・・・」

「それって何なの・・・冴子、怖い嫌いよ・・・」

「いや、ごめん、別に怖いものじゃないから。冗談だから、気にしない方がいいから。」

「でも、何か意味があるんでしょう。」

「ああ、調べてみたんだけど、パンドラの箱ってのはギリシャ神話に出てくる話なんだ。オリュポスの神々から贈られた箱をパンドラが内緒で開けたら、様々な災厄が出て来て世界を破滅させそうになったっていう神話なんだ。」

「えー、冴子、怖いいやよ・・・」

「でも、箱の中にはたった一つだけ残ったものがありました。それは、希望と呼ばれました。めでたし、めでたしっていうお話だから。」

「ふ~~~~ん・・・」

「だから気にする必要は全くない。このオルゴールは誰かの悪戯なんだよ。」

「うん、でも・・・先生も同じようなお話をしてたから・・・」

「先生って、文学部の？・・・」

「うん、嶋谷助教授。」

「その人が、何か言ってたの。」

「先生はとても優しくて良い方で、冴子は先生が主催するサークルに入ってるの。毎週土日に葉山の別荘で特別な講義があるんだけど、冴子には少し難しくて良く解らないの。」

「へー、葉山に別荘ってすごいな、どの辺にあるの。」

「ちょっと小高い所で、すぐ真下に葉山マリーナが見えるの。でも誰にも言っちゃ駄目よ。」

「すごいなー、冴ちゃんは毎週そこに行ってるんだ。」

「うーん、月に2回か3回かな。」

「でさ、覚えてる事でいいから……どんな講義をするの。」

「うーんと……神様の怒りが世界を滅ぼすとか、今世紀中に救世主が現れるとか、神様が自由な世界を再び創造するとか、んーあとは普通の講義。」

「……冴ちゃん、それってさ、カルトっぽくないのかな。」

「うーん、先生はご自分を無神論者だって、いつもおっしゃってるの。」

「なんかすごい怪しそうなんだけど。」

「そんな事ないよ、冴子は先生が大好きなの。あと奥様がとても素敵な方なの。」

「まあ、そうだよね、大学の先生がカルト教団なんか作る訳ないよね。」

「冴子は先生の事信じてるの……駕龍さんの事も……」

「うん、ごめんな冴ちゃん。こんな話もうやめような、演奏始ましたし、お食事も来たし、ごめんな。」

その日は遅くなると冴子の家族が心配すると思い、8時過ぎに店を出て、自宅マンションまで冴子を送り届けた。

冴子にはしつこく話をするのは避けたのだが、どう考えてもこのオルゴールはおかしい……………

甘酸っぱい想い出になる筈だった冴子との初デートは、あのオルゴールのせいで苦い経験になってしまった。

しかしオルゴールの話題がなかったら、冴子を誘い出すのは難しかったかも知れない。

絶対に次のデートでの失敗は許されない。新たに作戦を練り直さなければならぬだろう。

次回は冴子の好きそうな遊園地……………いや、やはり最強のデートスポットはディズニールランド以外にない。

『いつか王子様が』の話が出たので、最初のデート場所がジャズクラブになってしまったのだが、本来ならば遊園地を先にするべきだった。

でも自分が全く信用されていなければ、遅い時間のデートなので断られたかもしれない。という事は、自分は信頼を勝ち得たと考えてもいいのだ。

次は午前中からディズニールランドに行く約束をして、色々とお話をしたりとか楽しませてから明るいうちに家まで送るのが最善の策だ。そして、その次のデートこそが第一幕の感動的なフィナーレになる、と同時に自分と冴子とのラブストーリー第二幕の始まりとなる。

決め手になるのは恋愛映画しかないか。『哀愁』とか……………
でもこれは大人の物語だから冴子には少々解り辛いだろうし、自分自身も恋愛映画は余り好みではない。

冴子が感動しそうな映画はやはり『小さな恋のメロディ』しかないだろう。しかしミニシアターみたいな所でも上映しているのかどうか。

しからば、冴子を我が家にお招きするのが一番手っ取り早いし、自宅ならばホームシアター・キッチン・寝室の3in1フル完備なのだ。

僕は君の手料理を一度でいいから食べてみたかったんだ、とか言っ
て・・・・・・・・えっ、冴子はお料理した事ないの、とか言っ
て・・・・・・・・いや冴ちゃん、料理は真心を味わうものなんだよ、とか
言っ
て・・・・・・・・

そして少し照明を落としたリビングルームで『小さな恋のメロディ』
を冴子の肩を抱きながら鑑賞する。

まあ、なんて大きな隼人さんの瞳・・・・・・・・それはね、冴ちゃん
のお顔をよく見たいからなんだよ・・・・・・・・
まあ、なんて大きな隼人さんのお口・・・・・・・・それはね、冴
ちゃんを食べちゃうためなんだよ・・・・・・・・ガオ~~~~ガオガオ~~~~
）。

シナリオは完成した。

『愛の夢』が鳴っている。誰からだろう・・・・・・・・知らない電話番号だ。

「もしもし。」

「も・し・も・し・・・・・・・・」

「もしもし、駕龍ですが。」

「駕龍隼人か！」

「・・・・はい、そうですけど・・・・」

「よう、駕籠、貴様うちの娘をどうするつもりなんだ!!。エエ
~~~~。」

「はっ、えくと、どちら様ですか。」

「どちら様じゃないんだよ!!。」

「あ、あのう、失礼ですが、お名前は・・・・」

「失礼なのは貴様なんだよ。一体何のつもりでうちの娘を誑かした  
んだよ!!。エ〜このクズが!!。」

「あの、おっしゃっている意味がよくわか・・・・」

「ふざけるな!!! 貴様などな、病院送りにするのは簡単なんだよ  
!!。エ〜このガキが、調子にのりやがって!!!。」

「あの・・・・何の話なのか分からないんですけど・・・・  
。」

「駕籠、貴様は命が惜しくないらしいな!!。ん〜このクソガ  
キが〜!!!。」

「ですから、何かのまち・・・・あ、もしもし・・・・  
・・・・」

ドスの利いた男の声・・・・誰なんだ。

うちの娘と言っていたが、心当たりといえば・・・・まさか冴子  
の・・・・

クズ子と良子は・・・・

「もしもし・・・・」

「はいはい、あたちクズ子ちゃんでちゅよ〜」

「馬鹿野郎!!! ふざけるな!!!」

「どうしたの駕籠君・・・・」

「いいか、真面目に聞けよ。この間、葉山に行って帰りが遅くなっ  
た時、お前の父親は何か言ってなかったか。」

「え〜、お父さんがなんて言ったって・・・・」



「いいか、真面目に答えろよ。俺について何か言っただけだったか。」  
「駕籠君の事ならよく話するから・・・・・・・・・・え、何なの、どう  
いう意味？」

「お前の親父は怖い人なのか。」

「わけないでしょ。」

「俺の事も悪く思っていないんだな。」

「んなわけないでしょ.....あなたちょっとバ.....」

夜遊び好きなクズ子の筈はなかった。それでは良子の方が.....  
しかしあいつとは関係を持った訳ではない。

「もしもし、俺だ、俺。」

「おう、ブルジョア君か、今日は飯食ったばかりだから、また  
その内な。」

「電話で済むから、真面目に聞けよ！。あの女の事なんだ！！。」

「またかよ、本当に病院行った方がいいぞ。」

「俺があんな女とは全く関係がない、関係を持ったことなどないって  
のは本当の話だ。」

「うんうん、だからどうした。」

「あいつの周辺には変な男達がいるんじゃないかと思うんだよ。」

「うんうん、例えばお前とかな。」

「真面目に答えろよ！！命に関わる問題なんだ。あの女は一体誰な  
んだ。」

「プッ、命に関わるって何よ、真面目に話してみろよ。」

「あんな、お前だから話せるんだが.....さっき男から脅迫  
電話が掛かって来たんだ。」

「えっ、どんな脅迫されたんだ。」

「うちの娘に手を出したらただじゃ置かないとか、俺の命をどうの  
こうのってだよ。」

「お前さあ、他の女に手を出しただろ。」

「川上!!! お前はそうやって惚けて……あの女を庇う理由でもあるのか。」

「あの女あの女って言うてるけど、何て名前なんだ。」

「お前なあ、知ってるのに何で……」

「井上良子だろ。」

「ふざけるな!!!! 最初から知ってるのになんで嘘を吐いたんだ!!!!」

「あのな、あまり言いたくなかったんだけどな……」

「あゝあゝ……！」

「血の繋がった伯母の旧姓が川上だったわけよ。で、伯父の苗字が井上だったんだよ。伯父は優しくて物静かな人なんだ。」

「エツ・・・・・」

「でな良子の奴はな、家が近かったもんで毎日俺の家に遊びに来て、年下の俺を苛めて泣かすのを日課にしてたんだ。毎日なんだぜ、つねったり叩いたり蹴っ飛ばしたり。あいつは生まれつきサディストなんだよ。」

「エツ・・・・・」

「それからお前な、絶対に俺が喋ったって言うなよ。解ったかな、金田一君。」

「エッ.....」

[illegible]

それじゃあ、残ったのは冴子だけではないか。そんなまさか……

……

この間のデートで帰りが遅くなったのが父親か誰かの逆鱗に触れたのか。

しかし幾らなんでもあの言葉遣いは、堅気の人間とは思えない。

勇気を奮って冴子のケータイに電話を入れてみたが、圏外になっている……やはり……

また電話だ……さっきのとは違う……  
……誰だ。

「もしもし……」

「あ、もしもし、駕龍君かね。」

「はい、そうです。」

「日下部だけ。」

「あっ、先生、こんにちは。何か……」

「今自宅にいるの。」

「ええ。」

「ちよっと、折り入って話したい事があるんだけど、いま都合がつかないかな。」

「はい、特に用事はありませんので。」

「それじゃあ、大学の前のカフェで待ってるから。」

「はい、30分ほどで行けると思います。」

どうしたんだろう、日下部教授から呼び出されるなんて始めてだ。何の話なのか……なんとなく胸騒ぎがしてならない。車で向かう途中、再び日下部教授から電話があり、カフェではなく大学近くの公園に落ち合う場所を変えと言われた。

普段会話をしている口調とは異なり、その緊張したような言葉遣いから、尋常一様の事態ではない気配を感じ取った。

公園の入り口に立ったままで待っていたらしい日下部教授は、自分が車で来たのに気付き、歩道まで出て来て話は車の中であると言うのだった。

他人に聞かれてはいけない、大事な用件らしい。

「わざわざ、すまないね。」

「いえ、大事な話なんですか。」

「うん、そうだね、何から話したらいいかな。」

「自分が授業に出ていないからとか……………」

「いや、そうではないんだ……………」

「では他に……………」

日下部教授は明らかにいつもと違い、口籠もっているのがはっきりと判った。

「何でも構わず仰って下さい。」

「大学内での事なんだがね……………ああ、先ず一つだけ忠告して置かなければならない。」

「はい。」

「他言は無用だ。」

「はい、分かりました。」

「私も多少混乱しているし、総ての状況を把握している訳ではない。それは今現在情報収集に追われている為なんだ。」

「ええ。」

「実はね、今うちの大学関係者は公安当局から色々と訊き込みを受けているんだ。」

「何か事件でもあったんですか。」

「うーん、何から話したらいいかな。君は先週、爆弾テロ事件があったのは知っているね。」

「はい、30人くらいの方が亡くなったとか。」

「公安はその捜査を進めているらしいんだが、犯人と思しき人物の住むアパートから、ある名簿が発見されたそうなんだ。」

「はあ。」

「その50名以上のリストの中に、うちの学生数名の名前と住所と電話番号が載っていたそうだ。」

「それは実行犯とか、共犯とか、そんな感じなんですか。」

「それがまだよく分からのだよ。」

「自分も知っている人間がいるんですね。」

「まあ、それについても確かめたかったんだがね。」

「名前を言って頂ければ……」

「その前にね、なぜ君にこんな確実性の低い曖昧模糊とした話しを持ち掛けたかなんだが、何か知っているのではないかと思ったんだが。」

「えー、全然知りません。まさか自分が疑われているとか……」

「君はよく過激な発言をするからね、それに宗教的な表現も時折用いるのは自分自身で分かっているよね。」

「えー、まるっきりそれじゃ断定しているみたいじゃないですか。」

「いや、そうではなくて公安からも協力を依頼されているんだ。」

「他人を見たら殺人犯……ですか。」

「私が君を疑っていないのは理解してくれるよね。」

「ええ、まあ……」

「だから何でもいいから、どんな些細な事でもいいから気が付いた点があれば教えて欲しいんだ。」

「はあ……これといって……」

「友人関係で怪しそうな人間とかいないのかな。」

「いないと思いますよ。そんな過激派とか思想犯みたいな奴とは付き合いもないですし。」

「学内ではカルト宗教が蔓延しているんだが、心当たりはないかね。」



「それはこの中にはいないそうさ。」

「エエエエエエエエエエエエそんなあ……………」

「それじゃあ悪いけどね、大学の方に行こうか。一応公安に連絡する義務も負わされてるからね。」

「エエエエエそんな、嘘だ……………」

もしかするとパトカーに乗せられてしまうのかとも考えたが、大学内で簡単な事情聴取を受けただけだった。  
これから先に本格的な取り調べをされるのかも知れないが。

しかしそんな事はどうでもいい、選りによってなぜ冴子が……………」

翌日、駕籠は再び日下部を訪ね、解決しなければならぬ疑問点の  
解明に向けて動き出した。

最も気掛かりなのは、あの脅迫電話だった。

その件に付いては、今回の失踪事件とは無関係と考え警察には何も  
話していない。

しかし重要な緒となるかもしれないので、日下部にだけは事情を説  
明し協力を仰いだ。

日下部の話によると、失踪者の家族と何人か会って断片的な情報を  
得たが、冴子の父親は小児科医なのだという。

更にその父親は小柄で物腰が柔らかく、とても温厚篤実な人物な  
だそうだ。

つまりあの脅迫電話を掛けて来たのは、冴子の父親ではない可能性  
が高い。

駕龍の頭はすっかり混乱し、心は迷宮に迷い込んでしまった。

一体全体誰が何の目的であのような電話を掛けたのか一向に解らず、  
脳の回転が止まってしまった駕龍は、カフェに入ってビールを呷り  
始めた。

そして何本か飲んでいる内に、ある人物の事を思い出した。

それは冴子が話していた、文学部の嶋谷助教授だ。

事件とは関係ないかもしれないが、冴子が慕う先生に兎にも角にも  
会ってみたかったので、大学に戻って聞いたところ、病氣療養の為  
ここ10日ほど休んでいるらしい。

冴子の慕う嶋谷助教授がどんな人物なのかどうしても知りたかった  
ので、日下部にそれとなく聞いてみると、朗らかで柔和温順な紳士  
そのもの、間違っても激昂するようなタイプではないらしい。

しかし駕龍はジャズクラブで冴子が嶋谷の話をした時から、敏感に  
カルトの臭いを嗅ぎ取っていた。

昨日、日下部の言っていたカルト教団と爆弾テログループが、密接  
な関連で結ばれているというのは本当だろうか。

だとすれば、冴子の身近にいる嶋谷を疑ってみるのも選択肢の一つ  
として可能だ。今はそれ以外に手懸かりがない。

駕龍はもしかすると自分も既に、この事件の渦中に捲き込まれてい  
るのではないかと考えていた。

嶋谷と冴子と自分自身を結ぶ線は何なのか。

もし爆弾テロとの関連があるとすれば、冴子の身にも危害が及ぶ恐  
れがある。

今後の行動は、慎重の上にも慎重を期する必要があると、自らの肝  
に銘じた。



冴子は何故、葉山にある嶋谷の別荘の事は内緒にして置いてくれと言ったのだろうか。

それは恐らく口止めされており、その別荘こそが秘密のアジトでありテロの策源地になっていると考えれば辻褄が合う。

とすれば、冴子是人質としてそこに幽閉されている可能性が大だ。しかしこの事を警察に告げれば、冴子の身が重大な危険に晒されてしまう。

嶋谷と事件の関係については全く確証がなく、疑っているのは自分だけだからだ。

自分の身一つで行動して、確かな証拠を掴む以外に方法はないだろう。

最低限必要となりそうなビデオムービーは持っているが、高性能カメラがない。

これから買うのでは時間が無駄になるので、使い方がよく分かっている池澤の望遠レンズ付きカメラをまた借りる事にした。

昼間は自宅で寝ているそうなので、電話を入れたあと早速訪ねてみた。

「あ、先輩、おはようございます。」

「もう昼過ぎだぜ。」

「ついバイト先の習慣で……カメラですよね、バッグに入れました。」

「望遠レンズ、一番デカイやつな。」

「はい、全部入ってますから。」

「もしカメラ壊しちまったら、新しいの買ってやるわ。」

「えっ、そんな危険な盗撮なんですか。」

「アホか……まあ、盗撮って言やあ盗撮だけど、エロじゃ

ねえからな。」

「はあ……」

「後、お前ダーツ持ってたよな。」

「いっぱいありますよ、店からパクってきたのとか。」

「ハードダーツの一番重いやつ何本かあったらくれ。」

「ああ、先輩はシュート下手だったけど、ダーツは百発百中でしたよね。」

「余計なこと言ってねえで、早く出せや。」

「えーと……50グラムのハードダーツ……7本。」

「おう、上等、上等。」

「なんか先輩今日、すごい怖い顔してるけど何かあったんですか。」

「詳しい話しは出来ないけどな、お前にも無関係じゃないから、これから頼み事が多くなるかもな。」

「えー、それって何なんですか。」

「バイトのある日でも構わないから仕事バックレて、俺の命令を優先してくれ。その日のバイト代の3倍払うから。文句ないだろ。」

「い……先輩まさか本気で武装蜂起とか……火炎瓶とか……」

「馬鹿かよ。とにかくこの問題が片つくまでは俺の命令に従ってもらうからな。」

「はい……」

駕籠はTVRタスカンSを駆り、嶋谷の別荘がある葉山マリーナへと全開で飛ばした。

今日は道が空いていた為か、3時間ほどで目的地に到着した。

辺りを見回し、冴子が言っていた小高い所にある別荘らしきものを探すと、マンション以外に数軒の邸宅が目に入った。

しかし住宅地図を調べても、嶋谷の名前はどこにも見当たらない。

冴子は一軒家の別荘と、リゾートマンションを混同していたのだろうか。

そこがアジトだとすれば見張りを立てている筈なので、無闇矢鱈に歩き回ると不審に思われ、顔も覚えられてしまう。

明るいうちは車で回って調べたほうが良さそうだ。

リゾートマンションは暗くなってから調べる事とし、先に3軒ほどある邸宅を車内から窺ってみようと思い、車をノロノロと走らせた。しかしこの車はアイドリングでも相当な排気音が発生するので、何度も回ると怪しまれる。やはり2〜3回が限度か。

一軒目を見ると、小さい子供4人が外で遊んでいた。多分ここは違うだろう。

二軒目は人影は見えないがカーテンやブラインドは閉じていないので、現在も人が住んでいるようだ。

三軒目は全ての窓がカーテンかブラインドで、外からは見えないように閉ざされている。シャッターは閉めていないので人がいるのかも知れない。

ここが最も怪しいのだが、表札は谷岡になっている。

この家が葉山マリーナを見下ろす最も高い場所に位置しているので、どこからも監視や撮影は出来ない。

マリーナの近くに下りて上を見上げると、その邸宅の二階部分が見えた。望遠レンズを通すと撮影も可能なようだ。

車の中に陣取り、デジカメでその別荘の監視を始めた。

1時間以上が経過したが、未だに人影は見えない。そろそろ日が落

ちる時間だ。

薄暗くなって来たので今日はもう駄目なのかと思っていたところに、突然西側に近い窓のブラインドが開かれ男の顔が確認できた。

ブラインドを半開きにして庭の方を見ているようだが、ここからだ  
と丁度良い角度で写真が撮れる。

30秒足らずでブラインドは閉じられてしまったが、10枚以上の  
撮影に成功した。

その中から目線がこちらの方に向いている写真を1枚選び、日下部  
教授に問い合わせるためノートPCからメールに添付して送信した。  
数分後、日下部教授から電話が来た。やはりその男は嶋谷助教授本  
人だった。

自分が今どこにいるのかとか、この写真はどこで撮ったのかなど色  
々としつこく聞かれたが、いま東京にしていると嘘を吐いた上、こちら  
から先に電話を切ってしまった。

嶋谷がいるのであれば、きっと人質となった冴子もいるに違いない。  
仲間が何人いるのか全く判らないが、今夜明かりが消えてから中に  
入って調べてみるしかない。

腹ごしらえをしたり用足しをしたりしながら、明かりが消され辺り  
が寝静まるのを待った。

嶋谷の別荘2階の照明は、10時前に全て消された。

1時間くらい間隔を置き、車を50mほど手前にある空き地に停め  
て、嶋谷の別荘近くから様子を窺った。

別荘の回りは低い金属製の柵で囲われているだけなので、簡単に越  
えられそうだ。もし警報機が鳴ったら逃げ出すしかないが。

更に、空き巣や泥棒のようなテクニクはないので、どこも開きそ  
うになかったら諦めるより仕方がない。

低い柵を越えたが警報機は装備していなかったようだ。

当然だが、ドアと窓と裏口全てに鍵が掛けられており、ガラスを叩き割らない限り中には入れそうになかった。

ふと上を見上げると庭には大きな木があり、二階のベランダ周辺まで枝が伸びているのに気が付いた。

その木によじ登り、ベランダ近くまで伸びている今にも折れそうな枝を伝って行った所、ベランダに飛び付けばなんとか端に手が掛かりそうだ。

下に落ちるなどと考えている場合ではない。中には絶対に牙子がいるのだ。

そして、渾身の力を込め反動を付けてベランダに飛び移った。右手一本が残り、なんとか落下せずに済んだ。

かなり広いベランダで、二つの部屋と繋がっているようだ。窓は全部で四つある。

東側から窓を調べてみたが一つ目と二つ目は鍵が掛けられている。

三つ目の木枠の窓に手を掛けたところ、相当なガタがあつて半開きの状態になっている。

挟じ開ければ体一つ分くらいの隙間が出来るかも知れないので、音を立てないように両手で引っ張ってみた。

幾度となく押したり引いたりしていると、突然大きな音を立てて鍵が外れた。

この大きな音に、嶋谷は目を覚ましてしまっただろうか。開いた窓を元に戻し、ドキドキしながら10分以上待った。

どの部屋の明かりも点かず、物音もしないので音は聞かれなかったようだ。

取り敢えず鍵を開ける所までは成功したので、早速アジトの中へ潜入して搜索開始だ。

一応ポケットに入る小型の懐中電灯は持って来たが、今夜は月明かりが部屋の中まで差しているので今は使わない方がいいだろう。

最初に入った部屋は書物が沢山並べてあるらしく、机もあるので書斎のようだ。

この部屋は西側に近い方にある。寝室は恐らく朝日のあたる東側だろうから、そちらへは行かない方が良さそうだ。

冴子が閉じ込められているとすれば、一階の奥にある部屋か、或いは地下にも秘密部屋があって声が届かないようにしているのかも知れない。

書斎のドアを開け廊下に出ると、丁度真ん前が螺旋階段になっていた。

その狭い螺旋階段を降りると、左右に廊下が伸びており、ホテルの様な構造で南北に別れて幾つかの部屋があるらしい。

冴子がいるとしたら北側にある部屋か、地下の秘密部屋か物置の様な所に違いない。

東側を避け西側に行ってみると、一番奥の方に裏口がありその両脇にドアがあった。

一つはしっかりとした作りのドアなので部屋に通じていると分かったが、もう一つのドアは安っぽい丸のドアノブと軽いベニヤ合板で作られているらしい。

どうも部屋ではなく、物置か何からしいのだが懐中電灯で照らしてみると、回転式でドアをロックするようなツマミがついていた。

ドアノブを左右に捻ってもドアは開かないので、そのツマミを回してからノブを回したところ簡単に開ける事が出来た。

そしてドアを開くと目の前に急な階段のあるのが分かった。

ゆっくりと階段を降りていくと、またドアがあり、薄明かりが漏れている。

懐中電灯を点けて見てみると、一階のドアと同様に外から鍵が掛けられるようになっていた。

これは物置ではない、地下にある秘密部屋であり、確実に中には人がいる。

そしてゆっくり、ゆっくりとドアを開けてみた。

豆電球だけで照らされた薄暗いその部屋の中に、誰かがこちらに背中を向けて床に座り込んでいる。

懐中電灯で照らしてみると、ロープで後ろ手に縛られているのがはっきりと見えた。

そしてその背中には、二本のおさげ髪が・・・・・・・・・・

懐中電灯を顔の辺りに照らし、小声で呼びかけてみた。

「冴ちゃん・・・・・・・・・・冴ちゃん・・・・・・・・・・」

自分の声に気付いたらしく、顔を徐ろに動かし、自分の方へと振り向いた。

やはり冴子だった。

すぐさま自分は冴子の傍へ近寄り、縛られたままの冴子を抱きしめた。

「冴ちゃん・・・・・・・・・・」

冴子は幽閉され極限的な恐怖に見舞われた為か、全く口を開く事が出来ない状態のようだ。

しかし大粒の涙を流し、何度も何度も鼻をすすっているのがはっきりと分かった。

「冴ちゃん、生きててよかった・・・・・・・・・・助けに来たよ、お家

に帰ろう・・・・・・・・・・」

だがそこへ突然部屋の明かりがつけられ、銃声が鳴り響いた。驚いて入り口の方を見ると、嶋谷と中年の女、そしてその後ろには、AK-47自動小銃を持った男が立っていた。

そして、嶋谷は細長い葉巻を取り出し火をつけ、自分の顔をまじまじと見ながら言葉を切り出した。

「駕籠君かね。まさかここまで来るとは思わなかったよ。その勇氣だけは褒めてやろう。」

「嶋谷助教授ですね・・・・・・・・なぜ・・・・・・・・」

「なぜ？・・・君はなぜ、わざわざ警告を与えてやったのに聞き入れなかったのかね。」

「やはりあの脅迫電話は貴方だったんですね。」

「その通り。私が指示して、この・・・義弟の谷岡が君に電話したんだよ。谷岡はこの・・・妻の腹違いの弟だ。」

「冴子をどうするつもりだったんだ。」

「この女は口が軽すぎる。言っではならないこの別荘の事を君に漏らしてしまった。」

「口を封じるつもりだったんだな。」

「この女は知りすぎてしまった。しかし谷岡と私達夫婦を結ぶ証拠は全くない。邪魔なのは別荘を知っている5人の学生と、君だけだったんだ。」

「他の4人はどうしたんだ。」

「船の中で今ごろ・・・・・・・・どうしてるかね、身動きが取れない状態なので、そのまま放っておけばいい。」

「冴子だけどうしてここにいるんだ。」

「最初に君を処分するべきだったが、私の過ちで君はまだ生きている。この女は君を釣る餌に使ったのだ。まさかとは思ったが、君の方から来てくれて手間が省けたよ。」



「30人以上殺してるから、5人や6人は朝飯前って訳か。」

「ああ、あれもね私の過ちで、谷岡が無計画にやってしまった。第一目標は国会議事堂だったんだがね。」

「お前も同罪だ。人殺しめ。」

「生意気な口が利けるのも今のうちだけだから、精々吠え立てるがいい。」

「残念だったな嶋谷助教授、この別荘は既に公安警察の知るところとなっているのが判らないのか。」

「君は下手な嘘を吐くのが得意みたいだな。この女が恋しくてここまで来たんだろ。つまり君はこの女のために命まで懸けようとしたのだ。だから公安は勿論の事、誰にもこの別荘の話はしていない。」

「俺がそんな単純だと本当に思っているのか。」

「ほぅ、どういう意味か言ってくれるかな。」

「あんたにだけは言えんな。」

「では、ここで今すぐ若い命を捨てるかね。君が大切にしている幼な妻と共に。」

「あんたが爆弾テロの実行犯でなければ、死刑になる事はないだろうな。しかし学生6人を殺せば確実に極刑に処される。」

「なるほど、そうやって仲間割れさせたいのか。凶星だろ。」

「何を言っても無駄なようだな。」

「その通り、私たち3人は神によって創造された真の兄弟だからだ。」

「お前らが崇拜しているのは、神などではない悪魔だ。」

「君は面白そうな学生なのに非常に残念だな。」

「悪魔崇拝者は俺の体に触れる事は不可能なのだ。」

「ほ、君の信奉する神がそう言ったのかね。」

「その通りだ、そしてその名を正義と名乗れとな。」

「言いたい事はそれだけか。」

73

冴子を助手席に乗せてからエンジンを掛け、フルスピードで坂を下ってマリーナに通じる広い通りまで出た。

嶋谷は追って来ないのだろうか。自動小銃は冴子を背負って走っていた時、途中で落としてしまった。

近くに警察署か交番がないか探しながら、東京方面へ車を走らせた。

しかし突然、銃弾がリアウィンドウをぶち抜き粉々にした。

バックミラーに大型のバイクが映った。嶋谷に違いない。

10分足らずで追い付いてきたと言うことは、横に並ばれるのは時間の問題だ。

このハイパワーの車でも大排気量のバイクを振り切る事は不可能なのか。

そして遂に俺の真横に嶋谷はバイクをつけ、銃口をこちらに向け、不敵な笑みを浮かべている。

同じAK-47だ。連射されたら二人とも絶対に助からない。

俺は覚悟を決めステアリングを急激に右へ切り、体当たりで嶋谷をバイク諸共破壊する手段を取った。

大きな衝撃と共に、嶋谷はガードレールを越えて崖下に吹き飛んでいった。

しかし俺の車もコントロールを失い、ドリフトした状態から遂にはぐるぐると回転し、そして横転しながらガードレールにぶつかり崖下に転落してしまった。

そして海の底へ車が沈んでいくのが分かった。助手席では冴子が酸欠なのだろうか苦しそうにもがいている。

俺は冴子を、外されている車のトップから引っ張り出し、懸命に海面まで浮上しようとした。

そして俺の肺の中全ての空気を冴子に与えた。それから間もなくして、意識が消えて行った。

どれくらい時間が経ったのだろうか、いま俺は海を見下ろしているようだ。

大型クルーザーと小さいボートが見える。

小さいボートの上に冴子が横たわっているらしい。

そして冴子は苦しそうに水を吐いているのが判った。

助かったのだろうか。

俺はどちらにもいないようだ。しかし自分の命などどうでもいい。

俺は、この日のためにだけ今まで生きて来た。

ここはどこなのだろう・・・・・・・・・・・・・・・・何も見えない。

自分が海の底に沈んだことだけは、はっきりと覚えている。

でもさっきから女の声が聞こえる。天使なのだろうか。

自分は死んだら必ず地獄へ堕ちると信じ込んでいたが、違うのだろうか。

「駕龍さん………駕龍さん、聞こえますか。聞こえたら何か言ってください。」

あの世ではこんな感じで天使が囁きかけて来るんだろうか。

「駕龍さん、聞こえますか。」

ぼんやりと灯かりが見える。

「駕龍さん。」

この灯かり、長細い明かり、蛍光灯みたいな灯かり。

「駕龍さん、蛍光灯が見えるんですか。駕龍さん。」

あっ、女の顔が見える………天使か。

「駕龍さん、私は天使じゃなくなつて看護婦の吉岡ですよ。駕龍さん、さあ目を覚ましてください。」

「エッ………  
………  
………」

「私の顔がはっきり見えますか。」

「エッ………」

「駕龍さん………」

「エッ………貴女は誰ですか………天使さんじゃなくて……誰………」

「看護婦の吉岡文絵です。あなたは病院にいるんですよ。」

「俺は生きていた時、よく他人に病院に行けと言ってたけど。」

「生きていた、じゃなくて、今も生きていますよ。かすり傷で

済んだんですよ。」

「エッ、嘘でしょ。海に落ちて死んだんでしょ。」

「私の顔がはっきり見えますか。」

「ええ、綺麗な方です。」

「お世辞が言えるようになればもう大丈夫ですね。」

「お世辞じゃなくなつて……ほんとに生きてるのか。」

「一週間も意識がなかったんですよ。余り喋ると良くないから、またにしましょうね。」

「ちよつと待つて、冴子は、都築冴子は無事だったの。」

「駕龍さんの恋人の都築冴子さんなら、水を飲んだだけで全然怪我もなく、すぐ退院できたから安心してください。」

「あつ、恋人とかつて……まあ、そうなんだけど。」

「都築さんは退院後も駕龍さんをお見舞いに毎日いらしてるんですけど、面会出来なかったものですから、毎日泣いてらしたんですよ。」

「そうなんですか。」

「今日からは面会でさそうですから良かったですね。あとご両親と大学のお友達と先生が何回もいらしたみたいですよ。」

「あゝ、そうですか、でも一番最初に逢いたいの冴子だ……  
……アツ、そうだ嶋谷はどうなったか知ってますか。」

「あゝ、駕龍さんと同じ大学の先生だった人ですね。テログループの……」

「まさか……」

「全身打撲と両足骨折で当分病院から出られないらしいんですよ。」

「そうですか。なんとなく良かったような……」

「何か必要なものとかあったら何でも私に言ってくださいね。駕龍さんの意識のない間ずっと私が担当してたんですよ。院長先生に無理を言つて、特別に許可を頂いて駕龍さんの専属みたいな感じで。」

それから毎日下着を取り替えていたのも私なんですよ。ウフツ・・・」

「ああ、看護婦さん、それはどうもお世話かけちゃって。」

「これからは、文絵って呼んでいいんですよ。」

「エツ・・・」

「あっ、それから言い忘れていたんですけど、都築冴子さんと同じで毎日面会に来ていた方がいるんですよ。」

たしか森下さんで方だったと思うんですけど。あともう一人は井上さんだったかな。」

「エツ・・・」

誰か俺を地獄へ送り返してくれ・・・  
・・・但し、女のいない事が最低条件だ。





## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9547h/>

---

プロメテウスの呪い

2010年10月11日19時49分発行